

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		38	

2021年度

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報 38
～ 2021年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



①長野市 長沼城跡 遺景（発掘調査区と千曲川）



②長野市 長沼城跡 唐津焼皿



③長野市 石川条里遺跡 兜の立物 (中世)



④坂城町 上五明条里水田址 遠景 (平安時代)



⑤松本市 真光寺遺跡 古墳石室と掘方



⑥辰野町 沢尻東原遺跡 焼町式土器（縄文時代）



⑦飯田市 ナギジリ2号古墳 須恵器・耳環出土状況（古墳時代）



⑧飯田市 五郎田遺跡 遠景（弥生～平安時代）

目 次

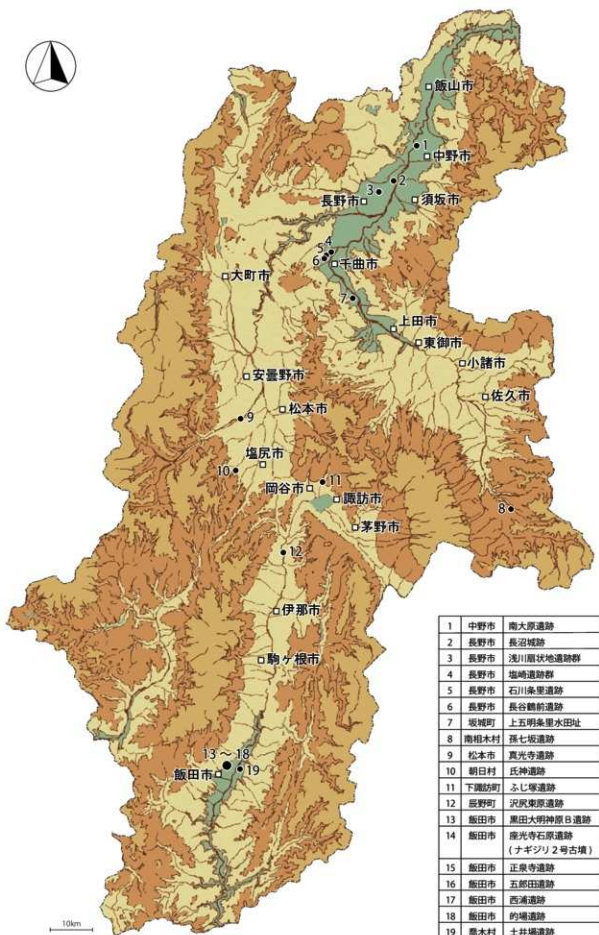
口絵写真

- ①長野市 長沼城跡 遠景
- ②長野市 長沼城跡 唐津焼皿
- ③長野市 石川条里遺跡 兜の立物
- ④坂城町 上五明条里水田址 遠景
- ⑤松本市 真光寺遺跡 古墳石室と掘方
- ⑥辰野町 沢尻東原遺跡 焼町式土器
- ⑦飯田市 ナギジリ2号古墳 須恵器・耳環
- ⑧飯田市 五郎田遺跡 遠景

目 次

I 2021年度の事業概要	1	(6) 縄文カード	39
II 発掘作業の概要	2	(7) 出版物	40
(1) 長沼城跡	3	V 指導者招へい	41
(2) 石川条里遺跡	5	VI 会議・研修会への参加	41
(3) 上五明条里水田址	7	(1) 会議・委員会等	41
(4) 孫七坂遺跡	9	(2) 研修会等	42
(5) 真光寺遺跡	11	VII 関係機関等への協力	42
(6) ふじ塚遺跡	13	(1) 学校関係への協力	42
(7) 五郎田遺跡	14	(2) 講師等の派遣	43
(8) 土井場遺跡ほか	16	(3) 関係機関等への協力	44
(9) 座光寺石原遺跡		(4) 調査資料の利用	45
正泉寺遺跡	17	VIII 組織・事業の概要	46
(10) 黒田大明神原B遺跡	19	(1) 組織	46
III 整理等作業の概要	21	(2) 職員	46
(1) 南大原遺跡	22	(3) 事業	47
(2) 浅川扇状地遺跡群	23	IX 調査研究ノート	48
(3) 塩崎遺跡群・石川条里遺跡		(1) 長野市塩崎遺跡群出土鉄剣の基礎的	
長谷鶴前遺跡群	25	検討	49
(4) 氏神遺跡	27	(2) 『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』更新	
(5) ふじ塚遺跡	29	に関わる分布調査	53
(6) 沢尻東原遺跡	31	(3) 下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚	61
IV 普及公開活動の概要	33	(4) 下諏訪町ふじ塚遺跡の和鏡	65
(1) 施設公開	34		
(2) 現地説明会等	35		
(3) 講座・出前授業・職場体験	36		
(4) 速報展・講演会等	38		
(5) 施設利用	39		

奥 付



1	中野市	南大原遺跡
2	長野市	長沼城跡
3	長野市	浅川扇状地遺跡群
4	長野市	塩崎遺跡群
5	長野市	石川条里遺跡
6	長野市	長谷鶴前遺跡
7	坂城町	上五明条里水田址
8	南相木村	孫七坂遺跡
9	松本市	真光寺遺跡
10	朝日村	氏神遺跡
11	下諏訪町	志じ塚遺跡
12	長野町	沢尻東原遺跡
13	飯田市	黒田大明神原B遺跡
14	飯田市	康光寺石原遺跡 (ナギシリ2号古墳)
15	飯田市	正泉寺遺跡
16	飯田市	五郎田遺跡
17	飯田市	西浦遺跡
18	飯田市	的場遺跡
19	農木村	土井場遺跡

図1 2021年度 調査・整理対象遺跡

I 2021年度の事業概要

本年度は、発掘調査事業は、国5件（一部市を含む）、県6件、市町村4件（うち2件は技術指導）、民間事業1件の計16件となった。このほかに県教育委員会からの研修等受託事業を実施した。また、普及公開事業として、施設公開および速報展、講演会、現地説明会等もを行っている。

1 発掘調査事業

国土交通省3億5537万円、長野県1億1132万円、その他1億3726万円の計6億395万円の受託費により、14箇所の発掘作業と6箇所の整理作業を行い、発掘調査報告書4冊を刊行した。

(1) 発掘作業

長野市長沼城跡では内堀、二の丸、北三日月堀推定地の遺構が確認され、縄張推定図や試掘調査の結果と調和的である。中世以降の遺構、遺物も検出され、廃絶後の土地利用も確認された。

長野市石川条里遺跡では、兜の立物（鍬形）一対が出土した方形に巡る居館の溝跡が検出された。現塩崎用水の直下から明暦堰や新堰の一部と思われる溝跡も確認できた。

坂城町上五明条里水田址では、洪水砂の上位に平安時代（10世紀）の集落跡が展開していた。また、その下位の洪水砂層と水田跡が検出でき、洪水砂層が分層できるなどの知見が得られている。

南相木村孫七坂遺跡では、昭和期の開発事業で地形が大きく改変されていたが、縄文土器を含む遺物包含層が確認できた。

松本市真光寺遺跡では、調査区の東側からは、7世紀末から8世紀の遺物が出土した径11～12mの古墳の墳丘が検出できた。また西側からは火葬施設、掘立柱建物跡、欄列跡といった中世遺構もみつかった。

下諏訪町ふじ塚遺跡では、縄文時代の「陥し

穴」と思われる土坑群が検出されている。

飯田市五郎田遺跡では、弥生時代中期から平安時代にかけての集落跡が検出された。伊那郡衛比定地である恒川遺跡群などと同一段丘面にあり、伊那郡衛との関連する遺跡の可能性もあろう。

飯田市座光寺石原遺跡では、ナギジリ2号古墳が確認された。径14mほどで、石室内からは鉄刀、鉄鏃、耳環や平瓶が、開口部からは7世紀末から8世紀の土器がまとまって出土した。後期古墳であるが、複数回の追葬が推定される。また、古墳時代の完形高坏、坏5点及び鉄鏃9点が出土した土坑があり、土坑墓の可能性もある。

飯田市黒田大明神原B遺跡では、縄文から弥生時代の堅穴建物跡を含む遺構群が検出された。

(2) 整理等作業

報告書刊行した遺跡は以下の4遺跡である。

中野市南大原遺跡：弥生時代中期後葉から後期前半の集落跡、日本列島最古級の鉄器加工工房跡が存在する可能性が指摘される。

長野市浅川扇状地遺跡群：のべ堅穴建物跡218軒等の多くの遺構が検出された。弥生時代にも集落域の移動があるが、おおむね平安時代までは、調査範囲全体に、集落が展開する。中世には一般集落はなくなり、居館（堀跡）中心になる。地域集落の変遷を把握できる成果となった。

朝日村氏神遺跡：縄文時代中期初頭から中葉にかけての当該地域における良好な一括資料と平安時代集落跡が検出、分析できた。

2 研修、普及公開事業

コロナ禍での制約の中、対策を講じて可能な限り実施した（詳細な内訳は33頁以下参照）。

（川崎 保）

II 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
長沼城	長野市	長沼地区 河川防災ステーション 整備事業	6000	10月11日～ 2022年3月18日	中世～近世：堀跡、溝跡、 土坑、遺物集中 近代：土坑、遺物集中	古代～近代：土器・陶磁器 中世～近世：石製器（臼、石 鉢）・土製品（土錘、櫛羽口）・ 金属製品（銭貨、鉄砲玉、釘、 簪）
石川桑里	長野市	一般国道18号 （坂城更埴バイパス） 改築工事	400	4月5日～6月7日	弥生・平安～近世：水田跡 平安～近世：溝跡 近世：道跡	平安・中世～近世：土器・陶磁器 中世～近世：金属製品（兜の立 物、銭貨） 近世：石器（砥石）・石製品 （臼）・木製品（櫛）
上五明桑里 水田址	坂城町	一般国道18号 坂城更埴バイパス （坂城町区間） 改築工事	3200	9月1日～ 2022年1月31日	平安：竪穴建物跡、焼土 跡、土坑 古代：水田跡	平安：土器・陶器・石製品・金 属製品（刀子、帯金具）
孫七坂	南相木村	防災・安全交付金 （通常砂防）（加速 化）Ⅱ（重点事業）	1300	4月2日～6月22日	—	縄文：土器 近世：陶器
真光寺	松本市	一般国道158号線 （松本波田道跡） 改築工事	6000	4月15日～12月20日	縄文～中世：土坑 古墳：古墳 中世以前：掘立柱建物跡、 欄列、溝跡 中世：火葬施設跡	縄文・古墳～中世：土器 縄文：石器（石鏃、打製石斧、 刃器） 古墳～中世：金属製品（鉄鏃、 銭貨）
ふじ塚	下諏訪町	一般国道20号 （下諏訪岡谷 バイパス）改築工事	1770	4月6日～8月27日	縄文：土坑 中近世：礫石経塚 不明：土坑、溝跡	縄文・古代：土器 縄文：石器（石鏃、刮片） 中近世：陶磁器・礫石経
五郎田	飯田市	中央新幹線 建設工事	1882	4月8日～ 2022年1月12日	弥生～平安：竪穴建物跡、 土坑 古代：掘立柱建物跡 不明：溝跡	弥生～古代：土器 弥生・古墳：石器（石鏃、打製 石斧、石包丁）・石製品（勾玉、 管玉）・土製品（紡錘車） 古墳～古代：金属製品（鉄鏃） 不明：漆製品
座光寺石原	飯田市		1000	12月14日～12月22日	—	—
西浦	飯田市		2073	2022年2月15日～ 3月18日	古墳：竪穴建物跡 古代：土坑、ピット	弥生～古代：土器・石器
的場	飯田市		504	2022年3月1日～ 3月18日	—	弥生～古代：土器
土井場	喬木村		8739	12月20日～ 2022年1月18日	—	—
座光寺石原	飯田市	社会資本整備 総合交付金 （広域連携）事業	7200	4月21日～ 2022年1月12日	古墳：ナギジリ2号古墳、 土坑墓	縄文～奈良・中世～近世以降： 土器・陶磁器 縄文：石器（石鏃、打製石斧、 横刃形石器） 古墳：金属製品（耳環、鉄鏃、 鉄刀）・玉類（ガラス小玉）
正泉寺			確認調査 510	11月25日～11月26日	—	—
黒田 大明神原B			4000	9月1日～12月13日	縄文・弥生：竪穴建物跡 不明：配石土坑	縄文・弥生：土器・石器（石 鏃、石錘、石匙、打製石斧）・ 石製品（石製円板） 縄文：土製品（土製円板）

ながぬまじょうあと (1) 長沼城跡

長沼地区河川防災ステーション整備事業

所在地及び交通案内：長野市大字徳保1036番2ほか 国道18号長野バイパス（アップルライン）大町交差点から北北東に約1km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の氾濫原にある。長沼城跡や長沼地区の現集落は自然堤防上に立地。遺跡西方の集落内を通る北国街道脇街道（松代道）沿いには往時の街並みが残っている。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.10.11～2022.3.18	6,000㎡	柳澤 亮 大竹憲昭 細田弘美 田中一徳

検出遺構

遺構の種類	数	時期
堀跡	2	中世～近世
溝跡	1	中世～近世
土坑	21	中世～近代
遺物集中	2	中世～近代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代～近代（碗・皿・内耳鍋・カワラケ）
土製品	中世～近世（土錘・輪引口）
石器・石製品	中世～近世（臼、石鉢、五輪塔）
金属製品	中世～近代（銭貨・鉄砲玉・かんざし・鉄釘・家具等の金具類）
その他	中世～近世（被熱赤化した壁材、鉄鏝、動物骨）

調査の概要

長沼城は戦国時代から江戸時代にかけての平城で、戦国武将の武田信玄にゆかりがあるとされているが、現在は果樹園などに利用され、城の痕跡はほとんど残っていない（口絵1-①）。

過去に調査例はなく、地元住民有志による長沼歴史研究会が作成した縄張想定図に基づき、2020年に長野市教育委員会が事前調査を実施したとこ



図2 遺跡の位置（1：50,000）

ろ、堀跡等の遺構や茶臼などの遺物が出土し、地下に城跡が包蔵されていることが確認された。

本調査は、34,500㎡を対象に本年度から2か年計画で実施する予定である（図6）。縄張想定図によると、調査対象地は南北方向が北三日月堀から南三日月堀・真心寺まで、東西方向が内堀・二の丸・中堀の推定地にあたる。なお、本丸部分は現在の千曲川堤防から河川敷にあり、調査対象からはずれている。

本年度は堤防沿いの北三日月堀、二の丸、内堀の推定地が調査対象である。調査開始が10月のため、終了地区はないが、地点別に概要を記す。

内堀推定地（図3・図6-①・②）

南側（図6-①）の調査区は内堀とほぼ同軸線上にあり、東西幅5m未満と狭小である。東西方向に5か所と南北方向の中央に1か所トレンチを設定した。最深部で検出面から約1.5mまで掘削したが、立ち上がりや底面に到達せず、堀跡の範囲と構造を把握するまでに至っていない。

堀跡の堆積状況は多様で、人為的に埋め戻された地点や明治以降に再度溝状に掘り直し、溝の底



図3 内堀推定地の調査状況



図4 二の丸推定地の調査状況

部に当時の陶磁器などが大量に廃棄された地点、埋没後に掘られた素掘りの井戸跡もある。

長沼城に関係する出土品として、17世紀初頭の唐津焼皿（口絵1-②）や五輪塔などがあるが、近代遺物と混在する場合が多く、堀の築造時期を特定できていない。なお、二の丸と内堀の境界付近（図6-③）では縄張想定図と合致する位置に堀の立ち上がりを面的に確認している。

二の丸推定地（図4・図6-③）

調査区の中央南寄りでは旧表土下に焼土と炭化物が面的に分布する範囲を確認した。焼土や炭化物に混じってカワラケや陶磁器類といった生活道具のほか、鉄砲玉や、火を受けて赤くなった壁材もみついている。また、その下には粘土を貼って

敲き締めた面や方形に区画する溝、礎石などが検出されていて、今後、屋敷地や建物跡と認定される可能性が高い。

北三日月堀推定地（図5・図6-④）

守田神社南に隣接する調査区で、2019年台風19号被害の前には三日月状の低地部があり、三日月堀の痕跡と想定されていた。重機による表土剥ぎにより、黒色土が三日月状に分布することが把握されつつある（図5）。写真にある砂礫層（重機周辺）は台風19号で隣接する堤防が決壊した際の堆積物である。

今後の調査

来年度は本年度着手した調査区を含め、各遺構の規模形態、時期などの特定を進めて、長沼城跡の実態を明らかにしたい。（柳澤 亮）



図5 北三日月堀推定地の検出状況（右が守田神社）

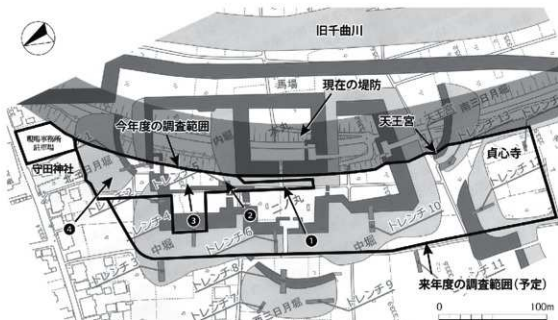


図6 縄張想定図と調査範囲（長野市埋蔵文化財センター所報32掲載図に加筆）
※縄張想定図は長野市教委の事前調査結果を反映している。

(2) 石川条里遺跡

一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事

所在地及び交通案内：長野市篠ノ井塩崎109ほか
JR 篠ノ井線稲荷山駅から南約1km

遺跡の立地環境：千曲川左岸に形成された自然堤防背後に広がる後背湿地に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.5～2021.6.7	400㎡	市田隆之 馬場伸一郎

検出遺構

遺構の種類	数	時期
溝跡	6 (175)	平安～近世
水田跡	2 (9)	弥生、平安、近世
道跡	1 (1)	近世

()内は2016年度からの合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	須恵器・黒色土器・灰釉陶器(平安)、内耳銅(中世)、瀬戸美濃碗・伊万里皿(近世)
石製品	砥石・石臼(近世)
木製品	椀(近世)
金属製品	兜前立物(中世)、銭貨(近世)

調査の概要

2016年度から2019年度の発掘調査では、弥生・平安時代の水田跡のほか古墳時代の大畦畔が発見された。本年度は、2019年度調査の11c区と12a区北・南の中間地点を調査対象とした(図8)。

12c区では2面の調査を行い、第1面で近世の水田跡・溝跡・道跡を、第2面で中世の溝跡・土塁跡と平安時代の畦畔を検出した。

なお、平安時代の水田跡上層には30cm程度の洪水砂が堆積しており、洪水後に地形環境が大きく変わったことが予測される。そのため、理化学的な古環境復元を目的とし、信州大学理学部(保柳康一教授研究室)に分析を委託した。



図7 遺跡の位置(1:50,000)

洪水砂で埋まる平安時代の水田跡

地表面下約2m下で洪水砂に埋没する南北方向と東西方向の畦畔を検出した。南北方向の畦畔は水口を伴う。12a区北で検出された平安時代の畦畔・水田跡に対応すると考えられる。

中世居館の堀と推定される溝跡

断面が逆台形の溝跡(SD191・192)を検出した。その溝底付近から兜の前面につける立物である鍔形一対が出土した(図9・口絵2-③)。立物と同じ層からは16世紀代の内耳鍋破片が出土している。また、調査区の南でトレンチ調査を実施したところ、SD191・192のコーナー部分を壁面観察で確認し、溝跡は方形に巡ることが判明した(図10)。約10mの幅広の溝跡で、中世居館の堀と考えられる。

19世紀前半に造成された塩崎村の水路

現塩崎用水の直下の第1面から幅約25m・深さ約0.5mの溝跡(SD188)を含む3条の溝跡を検出した。SD188の上部は攪乱されており、元々の幅は5m近くあったと考えられる。またSD188



図8 2021年度石川条里遺跡 調査地区(12c区)

(図11)は江戸時代後期～末期の陶磁器を伴い、溝底は南から北へ傾斜する。明治4年(1871)の塩崎村絵図(図11)には調査地区を通過し北上する水路が描かれている。SD188は塩崎村を南北に貫くその水路(「新堰」)の一部と考えられ、記録によると19世紀前半に遡る水路である。さらに、SD188の下層で検出したSD189・SD190の溝底は、SD188と異なり北から南へ傾斜する。それらは溜池の猪平池から流下する水路跡と思われる。

また、3条の溝跡の西側に接して山砂層主体の硬化面をもつ道跡と、水田跡を検出した。道跡は、中世の溝跡(堀)の土塁盛土を利用し造成されている。なお、当初、本調査区に存在が予測された古代の東山道支道は確認できなかった。

「新堰」と呼ばれた水路造成の経緯は「塩崎村史」(塩崎村史刊行会1971)に詳しい。17世紀中頃に「明暦堰」を、続けて猪平池や川越池などの溜池を17世紀の後半に設けたとあり、「明暦堰」に代わる新たな「新堰」が文政9年(1826)に完成したと記録にある。(馬場伸一郎)



図9 SD191出土の兜の立物(二枚重ねて折れた状態)



図10 中世居館の堀跡と考えられるSD191と推定範囲



図11 今回の調査地区と明治4年塩崎村絵図に記された「新堰」の流路

(3) 上五明条里水田址

一般国道18号坂城更埴バイパス
(坂城町区間) 改築工事

所在地及び交通案内：坂城町上五明557-2ほか
JR 坂城駅から南西約1.5km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の後背湿地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.9.1～2022.1.31	3,200㎡	寺内貴美子 水科沙華 大竹憲昭

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	18	平安時代
土坑	46	平安時代
焼土跡	1	平安時代
集石遺構	2	平安時代
杭列	1	平安時代
溝跡	1	古代
水田跡	1	古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・土製品	平安時代 (土師器、須恵器、灰輪陶器、緑輪陶器、土鏃、羽口)
石器・石製品	平安時代 (砥石)、縄文 (石鏃)
金属製品	平安時代 (帯金具、刀子、鉄滓)

調査の概要

本遺跡は、千曲川流域に位置し、坂城町網



図12 遺跡の位置 (1:50,000)

掛、上五明、上平地区の広い範囲が遺跡として広がる。これまでに、坂城町教育委員会や県埋蔵文化財センターによって何度も発掘調査が実施され、遺跡名にある水田跡以外にも、古墳時代や平安時代の集落跡が確認されている。

本年度の発掘調査では、地表下約1.2～1.5mから平安時代(10世紀)の竪穴建物跡や土坑などの集落跡、地表下約2mで水田跡を確認した。遺物としては、平安時代の土器を中心に、石器や金属製品が出土した。羽口や椀型滓などの鉄滓も出土しており、小鍛冶に関係すると思われる焼土跡も検出した。

平安時代の集落

竪穴建物跡は18軒みつがっているが、分布の状況から、調査区の東と西に集中する傾向がうかがわれる。形状は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈し、規模は1辺が約3mの小規模なもの、約4.5mの中規模なもの、約6.5mの大規模なものにわかれる。重複する建物跡も多くみられる。カマド

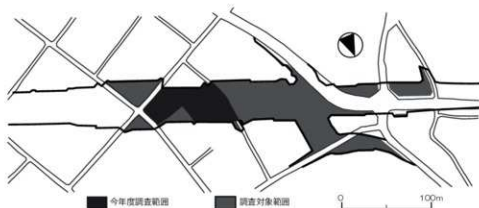


図13 調査範囲

は大半が東壁南寄りに構築されているが、北壁に位置するものもある。円礫を使用した袖石が現位置を保っていると思われるカマドや、袖石が残らないカマドなど廃絶時の状況は一律ではない。

小鍛冶に関係すると思われる焼土跡を1基検出した。別遺構からはほぼ完形の羽口や鉄滓も多く出土している。鉄滓は、焼土跡周辺以外にもみつかっており、他にも小鍛冶に関係する遺構がある可能性も考えらる。

砂に覆われた水田跡

集落跡の下層約0.6mからは、洪水砂に覆われた水田跡を検出した。遺物の出土がないため、はっきりとした時期は不明であるが、2008年の力石バイパス建設に係る発掘調査時に検出された平安時代前期水田と似た様相であることから、古代の水田の可能性が考えられる。この水田跡に伴う畦畔もみつかっており、大畦畔は緩やかに湾曲して南北方向に、小畦畔は大畦畔から直交、あるいは斜めに作られている。地形に合わせて水田を区画している様子がうかがえる。また、調査区壁の土層断面では洪水砂層は複数観察でき、何度も洪水に襲われたことが推察できる。

今年度の調査区では、この場所を水田として利用していたが、洪水後の10世紀には集落となったことが判った。次年度以降の調査では、10世紀の集落跡と下層水田跡の広がり、下層水田跡の時期、坂城町教育委員会の試掘で存在の可能性が指摘されている古墳時代の遺構遺物の有無などの説明が課題である。(寺内貴美子)



図17 古代の水田跡



図14 平安時代の竪穴建物跡 (SB01)



図15 平安時代の竪穴建物跡 (SB01) カマド



図16 平安時代の竪穴建物跡 (SB02) カマド



図18 焼土跡 (SF01)

(4) 孫七坂遺跡

防災・安全交付金（通常砂防）
（加速化）—（重点事業）

所在地及び交通案内：南相木村3894-1ほか
JR 小海駅から南東約8km

遺跡の立地環境：天狗山（1,882m）から連なる
山稜の北斜面に位置する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.2～2021.6.22	1,300㎡	寺内貴美子 春日皓介

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代（土器）、近世（陶器）

発掘調査の概要

本遺跡は1999年刊行の南相木村の遺跡詳細分布調査報告書に、縄文時代前期の諸磯C式土器片と石器が採集された縄文時代の散布地として登録されている。過去に発掘調査が行われていないため、遺跡の様相は不明であった。

そこで、トレンチを設定し、堆積状況の確認と遺構遺物の検出に努めた。その結果、本遺跡の現地形は、後世の造成土によるものであることが判明し、約3～4mの造成土の下に旧地形が部分的に残っていることを確認した。しかし、遺構は確認できなかった。

土器の出土

縄文土器7点が造成土の下層から出土した。口縁破片1点、胴部の小破片で、2点は接合した。いずれも焼成は良好で、摩耗も少ない。3点は縄文が施文されるもののいずれも小片であるため、詳細な時期は不明であるが、縄文時代前期後半以降と思われる。

他に、18～19世紀の瀬戸美濃焼の丸碗胴部の小破片1点が出土した。



図19 遺跡の位置（1：50,000）

整理作業の概要

基礎整理作業は、遺跡の発掘調査終了後に引き続いて行い、6月30日まで遺物と図面および写真の整理、各種台帳の作成を実施した。7月1日からは本格整理作業に入り、遺物の実測・トレース、図版作成、版組、原稿執筆を7月31日まで行った。印刷に合わせて遺物写真撮影を行い、3月に刊行した。

遺跡近くには、昭和55年頃に行われたに矢久保地区団体農開発事業の実施を示す看板があり、この事業の実施に伴い、造成が行われた結果、遺跡周辺の地形が大きく変化したと考えられる。一方で、縄文時代の土器を包含する層が部分的に残っていることが確認でき、周辺には縄文時代の痕跡が残っている可能性がある。（寺内貴美子）

参考文献

南相木村教育委員会 1999「南相木村遺跡詳細分布報告書」



図20 出土した縄文土器



図21 調査区全景（上から）



図22 孫七坂遺跡全景

(5) 真光寺遺跡

一般国道158号線
(松本波田道路) 改築工事

所在地及び交通案内：松本市波田1718-1ほか
長野自動車道松本ICから西に5.1km

遺跡の立地環境：真光寺遺跡は、梓川右岸に形成された河岸段丘の2段目（森口面）に立地する。同面には上野遺跡、葦原遺跡、波田下鳥遺跡等の縄文時代、奈良時代、平安時代、中世の集落跡が分布する。さらに遺跡隣接地には8世紀の築造と推定され、大井の開発に携わった統治者層を界ったと考えられる安塚古墳群、開削が中世にさかのぼり、「三溝」の地名の由来となった和田堰が調査区東側に、神林堰が西側に流れる。また、調査区西側には1557（弘治3）年に再興されたと伝わる真光寺が所在する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.15～2021.12.20	6,000㎡	西山克己 田中一徳 水科沙華 寺内隆夫 春日聡介

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳	1	古墳時代終末以降
掘立柱建物跡	2	中世以前
欄列跡	1	中世以前
火葬施設跡	7	中世
溝跡	19	中世以前
土坑	150	縄文時代中期?～中世
不明遺構	9	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代中期、古墳時代終末～中世
石器	縄文時代中期（石鏃、打製石斧、刃器）
金属製品	古墳時代終末～中世（鉄鏃、銭貨）

調査の概要

調査範囲の東側からは、現在の和田堰のもと



図23 遺跡の位置 (1:50,000)

なったと考えられる南北溝跡SD01、これに併行するように流れる南北溝跡SD02や東西溝跡SD04などの溝跡が検出された。

また墳丘と石室の上部が削平された状況で古墳SM01が発見された。SM01は南北約12m、東西約11.5mで葺石を巡らす墳丘で、横穴式石室を埋葬施設とし、横穴式石室前庭部等で須臾器を使用した祭祀行為が行われていた7世紀末葉から8世紀初頭の築造と考えられる。

さらに縄文時代中期と考えられる遺構や性格・時代は不明だが、焼骨が出土し意図的に石を割って使用した集石SX06、SX08および土坑なども検出された。

調査範囲の西側からは、掘立柱建物跡ST01や火葬施設跡SX12ほか、溝跡に柱穴を伴う欄列跡SA01、東西方向の溝跡SD10とそれに沿うように並ぶ土坑SK106ほか等が検出された。



図24 南北溝跡



図25 古墳 SM01墳丘と横穴式石室



図27 左：柵列跡 SA01 中央：溝跡 SD10
右：土坑列 SK106ほか



図26 掘立柱建物跡



図28 火葬施設跡 SX12より出土した銭貨3枚

掘立柱建物跡の柱穴は、その配列と掘方の形状から東西南北約1.8mの2間×2間の柱間隔となることが確認された。柱穴はさらに来年度の調査区（南西方向）に伸びる可能性が考えられる。

東西方向の溝跡に柱穴を伴う遺構は、検出時幅約20cm、深さ約10cmの溝内に約0.7mから1.8m間隔で柱穴が並ぶ柵列跡と考えられる。この柵列跡は、永楽通寶（初鑄年1408年）が出土した土坑 SK127と同じ規模で、同じ埋土である土坑 SK132に切られていることから、永楽通寶が使用されていた時期以前の遺構と考えられる。

火葬施設跡は、隅丸方形や円形の穴に焼土、炭化物、焼骨を伴う遺構が7基発見された。特に火

葬施設跡 SX12・SX13は、遺構の性格を考慮するうえで比較的良好な状況で検出された。

火葬施設跡 SX12からは6枚の銭貨が出土し、内3枚が付着して出土した。最上位の銭文やほか3枚の銭文の残存が悪いため、肉眼では読み取ることができないが、寛永通寶（初鑄年1636年）以前の銭貨の可能性が考えられる。

今年度の調査範囲で確認できた当地の土地利用については、東側ではわずかではあるが縄文時代中期に関わる遺構や古墳時代終末期以降に築造された可能性がある古墳や、西側では中世以前の遺構が集中していることが確認できた。

（西山克己）

(6) ぶじ塚遺跡

一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）
改築工事

所在地及び交通案内：下諏訪町社6922-2ほか
JR下諏訪駅から北北西約1.7km

遺跡の立地環境：砥川右岸の河岸段丘上で南向きの傾斜地に立地する。諏訪大社下社春宮の背後。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.6～2021.8.27	1,770㎡	長谷川桂子 河西克造 綿田弘美

検出遺構

遺構の種類	数	時期
土坑	7 (10)	縄文・不明
溝跡	2 (5)	不明
礫石経塚	0 (1)	中世末～近世初頭

()内は2020年・2021年の合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代晩期、奈良平安時代 中近世（陶磁器）
石器	縄文時代（石鏃、銅片）
礫石経（一字一石経）	中世末～近世初頭



図30 ⑩区 陥し穴と考えられる土坑



図29 遺跡の位置（1：50,000）

調査の概要

本遺跡は昨年度から調査を開始し、本年度はおもに遺跡の西部と東部の調査を行った（図31-⑨～⑯区）。⑨区で溝跡2条、⑩区で土坑1基、⑬区で土坑1基、⑭区で土坑1基、⑯区で土坑4基を確認した。いずれも遺物の出土が僅かなため、遺物から遺構の時期を判断できない。

⑯区の土坑は形状と坑底ピットの存在から、縄文時代の陥し穴と考えられる。縄文時代の本遺跡周辺は狩猟の場として利用された可能性がある。

また昨年度に調査した礫石経塚（SM01）の北側と東側（⑭区）は礫石経塚を検出した層が耕作などの影響を受けずに残存していた。そのため中近世の陶磁器類は出土したが、礫石経塚に関する施設は確認できなかった。また⑬～⑯区でも中近世の遺構は確認されない。これらのことから、ぶじ塚遺跡の礫石経塚は単独で存在していたことがわかった。（長谷川桂子）



図31 ぶじ塚遺跡全体図

(7) 五郎田遺跡

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4068ほか
JR 元善光寺駅から、南西約1km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の東側に向かい傾斜する低地段丘面に立地する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.8～2022.1.12	1,882㎡	藤原直人 鈴木時夫 遠藤忠実子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	34	弥生時代中期～平安時代
掘立柱建物跡	5	古代
土坑	340	弥生時代中期～古代
溝跡	2	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生時代中期・後期、古墳時代、古代
石器	弥生時代、古墳時代（石鏃、打製石斧、石包丁など）
石製品	弥生時代、古墳時代（勾玉、管玉）
鉄製品	古墳時代、古代（鉄鏃）
土製品	弥生時代、古墳時代（紡錘車）
漆製品	不明

調査の概要

JR 東海のリニア中央新幹線工事に伴う調査の中で、リニア本線部分の本調査は飯田市内で初めてとなる。五郎田遺跡の調査はこれまで行われておらず、弥生時代から古代の土器の散布地として知られていたのみであったが、2020年度に行った確認調査で遺構が密集する様子が明らかとなった。本年度の調査で確認した遺構は、弥生時代から平安時代の竪穴建物跡34軒、土坑340基、掘立柱建物跡5棟であるが、ほとんどの遺構が重複す



図32 遺跡の位置 (1:50,000)

るほど著しい切り合い関係であった。これまで遺構の存在が不明であった土曾川の左岸についても、弥生時代から古代と長期間にわたり大規模な集落が展開していることが判明した。

遺構と遺物

竪穴建物跡のなかで注目できるのは、古墳時代中期SB1である。北側と西側の2カ所に炉がつくられた、カマド導入以前の竪穴住居であり、この内の1つでは上面の焼土上に打製石斧が1点置かれている。また特徴としては、覆土の中央（床面から10cmほど上）で炭化物層がレンズ状に堆積していることである。同じ位置からは完形の土器や石器が多く出土しているが、中でも高坏が多くみられる（図33）。

古代の竪穴建物跡では、SB25は北西壁に横置き二つ掛けのカマド（図34）が造られている。また、SB32（図35）は東西11m×南北9.2mの規模があるもので、支柱穴も径が2m近くの大サイズが



図33 SB1炭化物層上面の土器出土状況

ある。この他の同時期の竪穴住居の規模がおおよそ5.2m～5.8m程であることから、同一時期の竪穴住居の中でも特に大型である。

遺物では、弥生時代中期から古代にかけての土器が出土しており、古代では、灰釉陶器や墨書土器が出土している。このほか、鉄鎌などの鉄製品、勾玉や管玉が出土しているが、中でも石器が多い。石包丁や磨製石斧のほか、特に打製石斧が多く、出土位置は検出面や弥生時代の遺構や古墳時代の炉やカマドからも出土していることから、後の時期まで石器が残るという、飯田地域の特徴をみることができる。

五郎田遺跡と周辺の遺跡

五郎田遺跡が位置する段丘上には、伊那郡衙と推定される国史跡の恒川官衙遺跡をはじめ、円面硯や帯金具・馬具などの遺物が出土している堂垣外遺跡がある。このような位置にあることから、五郎田遺跡も伊那郡衙に関係する遺跡であることが推定されるが、今回の調査ではこれらとの関連を示す遺構・遺物はみられなかった。しかし、本遺跡を含めて、遺跡周辺は恒川官衙遺跡を中心とする一大集落地であったことがうかがわれる。

(遠藤恵実子)



図34 SB25竪穴建物跡カマド



図35 調査区北西半（上空から撮影）

SB31はSB32と同時期の標準的な大きさの竪穴建物跡



図36 五郎田遺跡周辺の遺跡

(8) 土井場遺跡ほか

中央新幹線建設工事

所在地及び交通案内：下伊那郡喬木村306-2ほか
喬木村役場から北東約1.7km

遺跡の立地環境：天竜川左岸、低位段丘崖下の天竜川氾濫原に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.12.20～2022.1.18	8,739㎡	藤原直人、遠藤忠実子

調査の概要

土井場遺跡周辺は、現在、低位段丘上は畑地や宅地、低位段丘崖下は水田として利用されている。

本遺跡は弥生時代中期の土器散布地として知られ、調査区の南東約300mの低位段丘面上には弥生時代中期・古墳時代・平安時代の遺跡として知られる阿島五反田遺跡、阿島遺跡が存在する。確認調査ではトレンチを8本掘削した。現耕土（約20cm）の下には圃場整備時の造成と考えられる盛

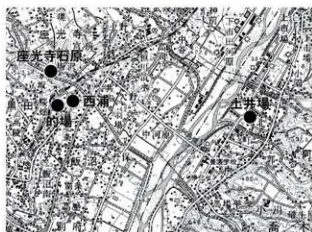


図37 遺跡の位置 (1/50,000)



図38 トレンチ調査風景 (1 T)

土（約60～80cm）がみられ、その下層には旧水田土壌（約20～40cm）が認められた。さらにその下には天竜川由来と考えられる砂礫層（60cm以上）が堆積している（1 T北側～3 T、5～7 T）。

調査区の南東部の1 T南側、4 Tでは造成土と旧水田土壌の間に、1961（昭和36）年に発生した三六災害に対応すると考えられる洪水粗砂の堆積が30～55cm認められた。

遺構・遺物が検出されないことや土層の堆積状況から、本調査は必要ないと判断した。

中央新幹線建設工事に伴う確認調査は、他にも本遺跡の北西約3kmの地点にある飯田市の西浦遺跡・的場遺跡及び座光寺石原遺跡についても実施した。（藤原直人）

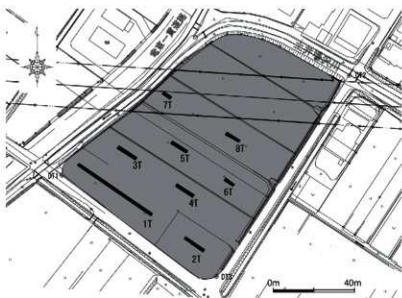


図39 トレンチ位置図

(9) 座光寺石原遺跡 正泉寺遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業

1 座光寺石原遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺2318-1ほか
JR 元善光寺駅から南西約1.3km

遺跡の立地環境：土曾川沿いに形成された谷地形
左岸の緩斜面に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.4.21～2022.1.12	7,200㎡	若林 卓 伊藤 愛

検出遺構

遺構の種類	数	時期
古墳	1	古墳時代
土坑墓	1	古墳時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世、近世以降
石器	縄文時代（打製石斧、石鏃、横刃形石器）
玉類	古墳時代（ガラス小玉）
金属製品	古墳時代（耳環、鉄鏃、鉄刀）

調査の概要

中央新幹線の（仮）長野県駅と中央自動車道座光寺スマートインターを結ぶ座光寺上郷道路の建



図41 ナガジリ2号古墳



図40 遺跡の位置（1：50,000）

設に伴い、座光寺石原遺跡の本調査と正泉寺遺跡の確認調査を実施した。昨年度より続く2年目の調査である。

座光寺石原遺跡は、昨年度調査で竪穴状遺構や集石炉のほか、古墳の副葬品とみられる鉄製品、玉類が出土したが、古墳自体は確認されなかった。本年度は9・11・12・13区の調査を行い、9区で古墳時代の墓とみられる土坑1基（図43）、13区では「下伊那史」において存在が指摘されていたナガジリ2号古墳を確認した（図41）。

正泉寺遺跡では、土曾川由来の砂礫層が広がるのみで、遺構や遺物は確認されなかった。

座光寺石原遺跡の調査

ナガジリ2号古墳は、1997年に飯田市教育委員会によって調査されたナガジリ1号古墳の南東に位置する。当該地は造成土が厚く盛られ、調査当初は古墳の有無を判別できなかったが、地権者に



図42 石室内の敷石の様子

よる位置情報をもとに造成土を掘り下げたところ、地表下約30cmで天井石を検出し、古墳の発見に至った。直径約14mの円墳で、石室規模は長さ約7m、最大幅は奥壁寄りで2.2m、入口幅約1.4m、高さ約2mである。左側壁（西）は内側に傾斜し、右側壁（東）は直立している。持ち送り式であった可能性があるが、後世の造成や河川からの土砂の流入などにより、石室全体が西から東に向かって押しされ、発見時の状態になったと考えられる。残存していた3個の天井石の中には、石を割ろうと試みた後世の矢穴が確認できた。

石室平面形は無袖式であり、梱石は検出されなかった。しかし、奥壁より約5.8m付近で最下段の壁体石がやや内側に入り、幅を減じる構造になっていることから、この付近が支室と羨道の境界とみることできる。石室内には敷石が施され、鉄刀や鉄鏃、耳環などの金属製品や、完形の平瓶が出土した。入口部分では閉塞石と重なるようにして土器や耳環・鉄製品が出土しており、追葬の際に移動された副葬品であると考えられる。このほか、石室開口部付近でも多量の土器がみついている。周溝は西から南東にかけて確認でき、北側は調査区外に及ぶ。幅は3.5～4m程度、深さは約0.5mであり、覆土最下層からは須恵器の甕などが出土した。

出土土器は7世紀前半から8世紀初め頃の所産であり、複数回の追葬があったと推察される。

古墳時代の土坑墓（SK04）の調査

座光寺石原遺跡9区は、「下伊那史」において「石原古墳」の存在が指摘されていた地区である。今回の調査では、古墳やそれに伴う遺構遺物は確認されなかったが、隅丸長方形を呈する土坑を検出した。長軸2.6m、短軸1.25m、深さは25cm程度であり、土坑内の北東隅と東～南にかけてテラス状の段が設けられていた。このテラス状施設では、東は高坏、南は内黒坏5点がいずれもほぼ完形で出土した。高坏は口縁部を東に向けて倒れた状態であったが、坏はすべて正位で置かれており、原位置を留めていると考えられる。また、土坑内北部では鉄鏃が9点出土した。鉄鏃の向きは

不同であり、当初の位置から移動している可能性が高いが、これらの遺物の様子から本遺構が墓であるとの判断に至った。木棺の痕跡はなく釘等の出土もないため、土坑墓であると考えられる。出土遺物は、古墳時代後期の様相を示している。

参考文献

- 下伊那誌編纂会1955『下伊那史 第二巻』
長野県飯田市教育委員会1998『ナギジリ一号古墳』



図43 土坑墓（SK04）

2 正泉寺遺跡

所在地及び交通案内：飯田市座光寺4098-4

JR 元善光寺駅から南西約1.2km

遺跡の立地環境：土曾川左岸の自然堤防上に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.11.25～2021.11.26	510㎡	若林 卓 伊藤 愛

調査の概要

正泉寺遺跡は、昨年度の調査で弥生時代中期の堅穴建物跡や土坑が検出されており、本年はその南東約100m地点で確認調査を実施した。

調査の結果、当該地の表土直下は土曾川由来の砂礫層が互層状に厚く堆積していることが判明した。遺構や遺物は検出されず、自然流路とみられる砂礫層が確認できたのみである。土曾川の氾濫原ないしそれに準ずる不安定な地盤であったと考えられる。当該地の本調査は必要なしと判断できる。
(伊藤 愛)

(10) 黒田大明神原B遺跡

社会資本整備総合交付金（広域連携）事業

所在地及び交通案内：飯田市上郷黒田2540

中央道座光寺スマートインターから南へ1.5km

遺跡の立地環境：天竜川の上段を北西から南東方向に傾斜する幅の狭い台地上。北東側は枡ヶ洞川によって開析されている。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2021.9.1～2021.12.13	4,000㎡	平林 彰、鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	6	縄文中期（1）・弥生（5）
配石土坑	1	不明

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文中期前葉（深鉢、鉢） 弥生後期（甕、壺、高坏）
土製品	縄文（土製円板）
石製品	弥生（石製円板）
石器	縄文（石鏃、石錐、石匙、打製石斧） 弥生（石鏃）

遺跡の概要

黒田大明神原遺跡は、鳥居龍藏らの調査で大正時代には縄文から弥生時代の遺物が確認され、『下伊那の先史及原史時代』に掲載されていた。

1995年の飯田市第2次調査で、縄文時代早期前半から前期末葉の竪穴建物跡11軒、柱穴列（大型建物跡）1棟、土坑21、集石28等が見つかり、1997年の第4次調査では、縄文時代中期初頭を含めた土坑8、集石6、弥生時代後期前半の竪穴建物跡1軒もみついている。飯田市は、南側の一段高い台地上にある縄文時代中期中葉から後葉を中心とした集落遺跡（黒田大明神原A）と分離し、本遺跡を黒田大明神原Bとした。



図44 遺跡の位置（1：50,000）

縄文時代と弥生時代の竪穴建物跡

今回の調査では、縄文時代と弥生時代の竪穴建物跡および時期不明の配石土坑を検出した。

縄文時代の遺構は、本格調査範囲の東寄りにある竪穴建物跡1軒（図47の白丸）で、これより西側や南側の傾斜地にはない。竪穴建物跡の平面は楕円形で、南北3.5m、東西2.9mと、当該期の建物跡としては小形の部類に入る。北から東の壁は、30cm程度ゆるやかに立ち上がる。床は、中央付近に灰白色粘土が貼られ、水平で硬い。炉跡は床のほぼ中央に位置し、深さ20cmの掘方中央に深鉢形土器の口縁から胴上半部を正位に埋設している。ただ、掘方や埋設土器内に焼土や炭化物は残っていない。この炉跡を中心にして、柱穴が3本みついている。掘方はいずれも深く、比較的細い。

建物跡の埋土上層から、こぶし大以上の礫とともに土器片や打製石斧、石鏃などが出土している。埋設土器の時期は不明だが、埋土上層の出土土器から判断して、この竪穴建物跡は中期前葉には廃棄されたと想定している。



図45 縄文時代中期前葉の竪穴建物跡遺物出土状況（北西から）

弥生時代の堅穴建物跡は、調査範囲の北寄りの台地縁辺で5軒みつかった（図47の白四角）。全体形が把握できるSB1001は、長辺〔北西-南東〕4.98m、短辺4.36mの隅丸方形で、壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱は4本。北西側の主柱間に炉線石を配した埋甕炉^{まいぼうろ}を設け、南東壁中央に出入口施設を構成する土坑がある。床には灰白色粘土を貼って叩き締めており、非常に硬い。

弥生時代の堅穴建物跡にみられる床や壁の造りや施設の位置などの特徴は、他の4軒もほぼ同じで、出土遺物が少ない点も共通している。

縄文時代から弥生時代の遺跡範囲

図47の中央を東西に走る道路からプレハブの下を通過して、南東（右）側の交差点に向けて埋没谷が延びている（白破線範囲）。フルーツライン建設前の飯田市第2次調査では、この交差点付近で湿地が確認されている。今回実施した1200㎡の本調査とその南東側の確認調査では、埋没谷に向かう両側の斜面には遺構が存在しないことがわかった。

一方、台地の北（左）寄りでみつかった弥生時代の堅穴建物跡5軒のうち北端の3軒は、堅穴の北側半分が欠失している。この台地は、弥生時代



図46 弥生時代後期の堅穴建物跡（南東から）
かがんだ人の前が炉跡

後期まではもう少し北側に拡がっていたとみてよい。また、本年度の飯田市の調査範囲（ブルーシートがかかる部分）や、過去の飯田市の第2・4次調査地点では、縄文時代早・前・中・晩期と弥生時代後期の堅穴建物跡や集石、土坑などが確認されている。

以上により、黒田大明神原B遺跡の縄文から弥生時代の遺構は、台地の比較的高所にあたる図47の黒線範囲に分布していたものと考えられる。

（平林 彰）

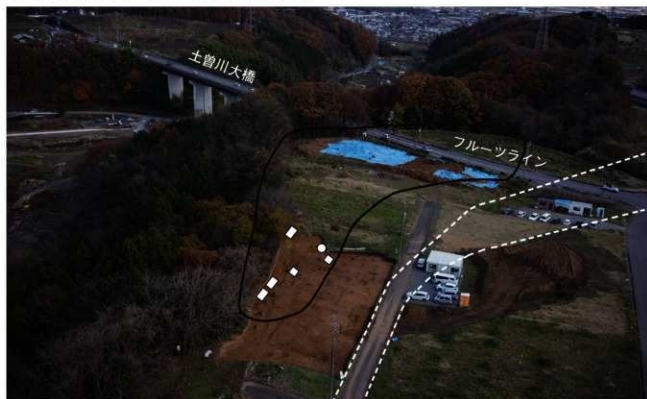


図47 黒田大明神原B遺跡全景（西から）○：縄文時代の堅穴建物跡、□：弥生時代の堅穴建物跡

Ⅲ 整理作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容(作業)	整理中の主な成果
南大原遺跡	中野市	防災・安全交付金(道路)事業 一般県道三水中野線	遺構図のデジタルトレース、遺物実測・トレース、原稿執筆、報告書印刷・製本・刊行	昨年度に5次調査を行い、弥生時代中期後半と後期前半の集落を確認した。調査では、鉄製品や小鉄片、台石などが出土した堅穴建物跡があり、鉄器加工等の工房が推測される。また、過去の調査成果を合わせ、祭祀場と推測する環状土坑列と墓域を取り囲むように堅穴建物跡が分布する中期後半の集落景観を復元した。
浅川扇状地遺跡群	長野市	社会資本整備総合交付金(街路)事業(都) 高田若槻線	報告書印刷・製本・刊行	本遺跡は弥生時代から近代までの複合遺跡で、以下の注目すべき遺構・遺物を確認した。遺構検出面などから出土した縄文時代早期末の土器片と滑石製球状耳飾りは、扇状地の縄文時代を考える貴重な資料となる。弥生時代では、集落が中期中葉から中期後葉にかけて移動したことが分かった。古墳時代では、北陸地域や東海地域の特徴を持つ多数の土器の出土、堅穴建物跡218軒で構成された奈良・平安時代の集落からは、華立付門面観や帯金具など、官衙関係遺物が確認された。中世以降では、倒原要害にもと比定される堀跡がみつき、居館の構造がうかがえる貴重な資料を得た。
塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群	長野市	一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事	遺構図のデジタルトレース、土器接合・分類・計測・復元・実測・トレース、金属製品のクリーニング、出土骨の鑑定指導	塩崎遺跡群は弥生時代～平安時代の複合集落遺跡で、堅穴建物跡を412軒検出した大集落である。本年度の整理作業では、本遺跡から弥生時代前期と推測する土器が複数確認できた。土器は逸賀川系や柴山山出村式とみられるものである。石川条里遺跡では、土器整理に加えて銭貨など金属製品のクリーニングを行い、長谷鶴前遺跡群は遺構整理・遺物整理はほぼ終了した。
氏神遺跡	朝日村	朝日村向原地域道路等整備事業	遺構図トレース、遺物復元・実測・トレース、遺物写真撮影、遺構・遺物図版組、原稿執筆、報告書印刷・製本・刊行	本遺跡は縄文時代中期初頭・中葉と、平安時代(10世紀)の集落である。中期初頭は北陸系や東海系など遠隔地の土器が含まれているが、中期中葉には認められないこと、黒曜石の産地推定分析結果は、諏訪エリアの屋ヶ台群95%、和田エリアの鷹山群と小深沢群5%であることがわかった。平安時代の集落構造と、墓坑に埋葬された人骨の年齢層などが分かった。
ふじ塚遺跡	下諏訪町	一般国道20号(下諏訪バイパス)改築工事	遺物注記・分類・計測・写真撮影・文字判読	昨年度の調査で発見した礫石経塚から出土した礫石経の整理作業を実施した。約4万点の礫石経(一字一石経)には、法華経(妙法蓮華経)や大日経、浄土三部経の経文と梵字が書写されていることが分かった。
沢尻東原遺跡	辰野町	北沢東工場跡地の開発事業	土器の接合・復元、遺構図トレース	本遺跡の縄文中期集落は、遺構配置から2群に分かれており、両者は存続期間が異なることが分かった。顔面把握手付深鉢をはじめ、諏訪地域を含む八ヶ岳西麓～関東南西部と関係が深い髷坂式土器や、平出三類A、下伊都型柳形文、後沖式、焼町式土器が一定量出土し、さらに東海や関西、北陸系等の土器がみられた。本遺跡は広範囲な交流が行われていたことがうかがえる。

(1) 南大原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業
一般県道三水中野線

2021年9月に発掘調査報告書を刊行した。

本遺跡は、千曲川沿いに形成された自然堤防上に位置する。千曲川は明治期の瀬替えにより、現在遺跡西側に位置するが、それ以前は遺跡東側を流れていた。4次調査（2016年報告）に続く調査区で、主として弥生時代中期後半と後期前半の集落跡を確認した。

鉄製品や小鉄片、砥石、台石、焼成粘土塊などが出土した竪穴建物跡は、鉄器加工などの工房だったと考えられる。特に中期後半期の集落中央には祭祀場と想定する環状土坑列があり、その周囲に墓域や遺物集積が分布し、それらを取り囲むように竪穴建物跡が確認された。過去4回の調査と合わせて、弥生時代中・後期の集落景観の復元も進めることができた（図48）。

今後の展望 2021年12月、本遺跡から千曲川下流

14kmに位置する根塚遺跡（木島平村・県史跡）で三韓土器の破片が確認されたとの報告があった。根塚遺跡は弥生時代後期の朝鮮半島製と考えられる渦巻文装飾付鉄剣（県宝）が出土したことで著名である。本遺跡下流7kmの柳沢遺跡（中野市）で2007年に確認された青銅器埋納遺構も含め、近年千曲川流域一帯で弥生時代中・後期における他地域との交流関係の新知見に結び付く調査成果が蓄積されつつある。

以上の周辺地域の状況と本遺跡の調査成果から当地域が、弥生時代中期後半期という全国的に見ても極めて早い時期に、鉄器加工などの新技術がどう伝播し、受容したのか、千曲川流域全体の弥生研究においても重要な課題となっている。

なお、調査報告書は以下のサイト上でWEB公開されているので詳しい内容については参照されたい。（柳澤 亮）

『全国遺跡報告総覧』

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

<https://sitereports.nabunken.go.jp/115190>

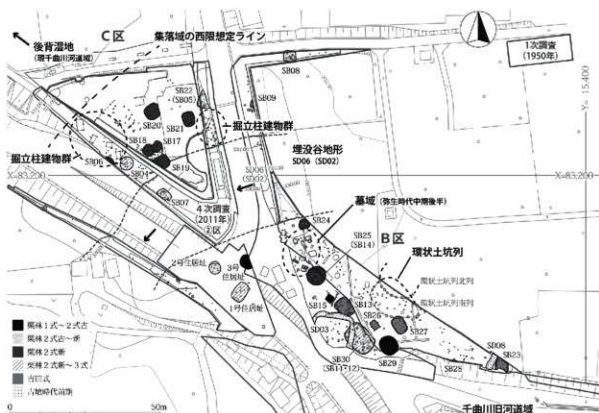


図48 弥生時代・古墳時代の遺構分布と時期変遷（調査報告書より転載）

(2) 浅川扇状地遺跡群

社会資本整備総合交付金（街路）事業
（都）高田若槻線

浅川扇状地遺跡群は2011年度から発掘調査を実施している。2020年度までに遺構・遺物記録の作成や、報告書作成にあたっての原稿作成等の主な本格整理作業は終了し、本年度は、報告書の印刷刊行及び収納を行った。これにより、本事業の発掘調査はすべて終了となった。

以下に、概要を述べる。

縄文時代

調査区内から、縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺構検出面及び他時期の遺構埋土から土器片や石器・石製品が少量出土している。特に、調査地最南の地区から出土した早期末の土器片と同時期の滑石裂球状耳飾りは、扇状地の縄文時代を考える上で貴重な資料となった。

弥生時代中期

調査区内から、弥生時代中期の遺構は検出されなかったが、吉田田町地区の古代の自然流路埋土からは、該期の土器片がまとめて出土しており、流路の上流にあたる調査区北西側に、末周知の遺跡が存在する可能性が考えられる。

弥生時代後期

弥生時代後期中葉から後期末に属する遺構が、調査地最南側の一部の地区を除くすべての地区で見つかっている。検出した遺構は、竪穴建物跡26軒、墓跡1基、溝跡・土坑などである。

その内、後期中葉の遺構は、調査地北側の吉田田町地区から竪穴建物跡などがまとめてみつかっていて、集落が形成されていたことが分かる。この地区の北西側には「吉田式土器」の標識遺跡である吉田高校グラウンド遺跡があり、この集落との関係が注目される。

また、後期後葉の遺構は、調査地南側にあたる桐原地区から竪穴建物跡などがまとめてみつかっていて、集落が南に移動したことが分かる。そして、後期後葉の集落の北側にあたる地区からは、集落の最終段階あるいはその直後に造営されたと考えられる後期終末の方形周溝墓がみついている。周溝墓の主体部は検出できなかったが、その規模や周溝から出土した、口縁が二重となる珍しい形態の壺等の遺物から、その被葬者や当時の人々の様子がうかがわれる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、調査地最北側の一部の地区を除くすべての地区で見つかっている。検出した遺構は竪穴建物跡57軒、溝跡25条、墓跡6基、土坑などである。



図49 縄文時代早期末の土器片



図50 滑石製の球状耳飾り

特に、前期に所属する竪穴建物跡は地区の広範囲で検出されており、調査区境に位置するものも複数みつかった。集落が東西の調査区外に広がっていたものと考えられ、かなり大きな規模の集落が営まれていたことが分かる。また、竪穴建物跡から出土した北陸地域や東海地域の特徴をもつ土器は、古墳時代に東日本の各地で展開された広範囲な地域間の文化的交流をうかがわせる。さらに、調査地からは、該期の墓域も確認されており、方形の墳墓が6基近接してみつかった。いずれの墳墓も主体部や墳丘は残存していなかったが、周溝内からは西濃地域の影響を受けた高坏等を使用した葬送儀礼の跡がみつかった。被葬者の性格を考える上で重要な資料となった。

古墳時代の中期・後期の調査地は竪穴建物跡や溝跡が確認できたが、その数は半減して、集落の規模はかなり縮小してしまうことが分かった。

奈良・平安時代

調査地区の北端や南端の地区からは該期の遺構はみつからないが、検出した遺構は竪穴建物跡218軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡、土坑等である。調査地内で当該期の遺構が最初に確認されるのは7世紀末で、以後9世紀後半まで竪穴建物跡が重複して確認され、調査区境に掛かる遺構も確認されるなど、かなり大きな規模の集落が営まれていたことが分かる。しかし、10世紀以降、竪穴建物跡は確認されておらず、集落は別の場所に

移動したと考えられる。古代の竪穴建物跡等からは、筆立て付円面硯や帯金具、緑釉陶器などの「官衙関連遺物」といった一般集落にはあまりみられない遺物が出土して、集落に暮らしていた人々の性格を考える上で貴重な資料となった。

中世以降

中世遺構に所属する遺構は掘立柱建物跡4棟、溝跡19条（堀跡含む）、墓跡7基、土坑等である。桐原地区で桐原要害（中世豪族居館）の堀跡や同時期の井戸跡等がみつかり、調査地が居館の一部であったことが分かった。また、7基みつかった墓跡は、いずれも居館跡よりは北側の地区でみつかった。また、7基みつかった墓跡は、遺体を木棺等に納めて埋葬したと考えられ、居館に近い南側の桐原地区のものは土葬されたと考えられる。このような違いは、時期や埋葬された人物の性格の違いを反映していると考えられる。当該期の遺物は、量的には少ないものの、内耳鍋等の在地の土器のほか、中国産の磁器や渡来銭等の遺物も出土している。

また、吉田町地区の北国街道に面した地区などからは近世以降の土坑などがみつかった。土坑埋土からは、生活雑器の陶磁器類や銭貨、金属製品などが多数確認されている。

以上、今回の調査で桐原・吉田町地区の歴史解明に新たな資料を提示することができた。今後この調査成果が活かされることを期待したい。

（西香子）

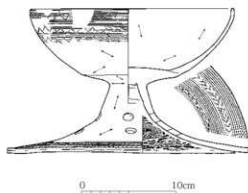


図51 古墳時代前期墳墓の周溝から出土した西濃地域の影響を受けた高坏

(3) 塩崎遺跡群・石川条里遺跡 ・長谷鶴前遺跡群

一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事

塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群は長野市南部の塩崎地区にあり、3遺跡を貫くように一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築工事が計画されたことから、2013年(平成25年)～2021年(令和3年)に発掘調査した。

3遺跡はそれぞれ自然堤防・後背低地・崖錐地形に立地し、検出遺構や遺跡の性格も異なるが、隣接して相互に関連するため3遺跡を平行して整理している。整理作業は2016年(平成28年)より開始し、本年度も継続中である。

本年度の塩崎遺跡群の整理作業は、遺物分類・接合・補強・計測・図化・トレース作業、出土遺物と遺構の照合と遺構デジタルトレースを進めた。また、出土骨の鑑定指導も前年度に続いて実施した。石川条里遺跡は金属製品のクリーニングを終了し、出土遺物の分類・図化・トレース作業を行うと共に、遺構図トレースを進めた。長谷鶴前遺跡群は遺物整理・遺構整理をほぼ終了し、報告書掲載にむけて資料の体裁を整える作業を進めた。

本年度の整理作業のなかで、塩崎遺跡群出土土器のなかに弥生時代前期と思われる土器が複数確認できたので、ここに取り上げて中間報告として紹介する。

塩崎遺跡群の弥生時代前期土器

塩崎遺跡群は弥生～平安時代の複合集落遺跡で、検出された堅穴建物跡は412軒である。そのなかで最も古い遺構として弥生前期末～中期初頭頃の土器棺再葬墓と円形貯蔵穴が確認された。建物遺構は捉えられなかったが、当該期の土器は後代遺構内や検出面出土土器に混在して出土している。破片資料が多い上に、一括性が確認できる出土状況はないが、弥生時代前期末頃と思われる遠賀川系や柴山出村式とみられる土器片が認められた。この遠賀川系土器は、土器棺再葬墓や円形貯蔵穴が分布する微高地東側の比較的高い場所から

若干離れた後背低地側に寄った地点で多く出土している。円形貯蔵穴や土器棺再葬墓とは若干分布域を違えるので、時間差か空間利用の状況によるとみられる。

遠賀川系土器は甕(図52-1・2)、壺(3)、蓋(4～6)、鉢(7・8)がある。甕は140片以上抽出できたが、多くが特徴を見出しやすい口縁部から頸部の破片で、体部や底部は他時代のハケ調整甕と峻別は難しく、あまり抽出できなかった。

甕の1は、破片資料が多いなかで唯一底部から口縁部まで確認できた資料で、検出面出土である。器形は平坦な底部から直立気味に体部が立ち上がり、体部上部でやや膨らみ、頸部から緩やかに短く外反する口縁に続く。口唇部にはハケ工具によるとみられるキザミが施され、頸部には平行沈線4条、体部はタテハケ調整される。また、底部が穿孔されている。2も口縁部の形状は類似し、口唇部にハケ工具によるキザミが施され、口縁内面はミガキ調整される。本遺跡から出土した遠賀川系甕は図示した破片とほぼ同様の形状だが、頸部の平行沈線がない破片も少量ある。

壺は3を図示した。近接グリッドの検出面から出土した同一個体と思われる複数破片で、頸部～体部の形状が窺える個体である。歪みのある小片から図示したが、頸部と体部上部に数条の沈線が認められ、外面は丁寧なミガキ、内面も雑なミガキが施される。また、体部の沈線部分は若干盛り上がる。遠賀川系に類似する壺は僅かしか認められていないが、体部文様が少ないことや、平行沈線のみでは弥生時代中期後半の栗林式壺と誤認しやすく見逃した可能性がある。ただし栗林式壺の沈線とやや異なる細い平行沈線の壺破片は一定量認められている。

蓋は二つの突起状ツマミが付く4、沈線で鋸歯状の文様が施される5、木葉状の沈線が施される6がある。

鉢は短い把手が付される破片が数片確認でき、図示した7は外面がタテハケ・内面がミガキ調整される小形品で熱を受けて赤化している。8は土製円盤の可能性のある破片で、全体的にやや摩滅

しているが、粘土を貼り付けた半円形の短い把手がつく。全体的に磨滅しているため調整は判然としないが、ナデ・ミガキ調整とみられる。

柴山出村式とみられる土器は9～11がある。9は頸部以上が欠損するが、頸部以下はほぼ全体が残る。頸部は無文帯を挟んで体部上部に沈線とケズリを加えた文様、体部にタテ沈線とタテ矢羽根状沈線が施される。微細な円礫とみられる砂を含み海浜部からの搬入品の可能性もある。10は灰白色の比較的緻密な胎土で、タテ方向と矢羽根状沈線が認められる。明らかに搬入品とみられる。11は先端が鋭い工具で施文され、同工具を用いた土器が他に認められ、胎土からも当地域で製作され

た模倣土器とみられる。

今回紹介したような遠賀川系土器が塩崎遺跡群で出土していることは既に石川日出志氏により指摘されていた(石川2000)が、壺・甕以外の器種の存在や、甕なども一定量存在することが確認できた。長野県北部にある本遺跡で遠賀川系土器が一定量出土した背景は注目される。また、県内ではあまり知られていなかった柴山出村式土器の出土が捉えられたが、これ以外に伴うとみられる条痕文土器群や水式系統の土器群の様相の解明も課題である。(市川隆之)

引用・参考文献

石川日出志 2000 「農耕文化の歩み」『長野市誌』第二巻

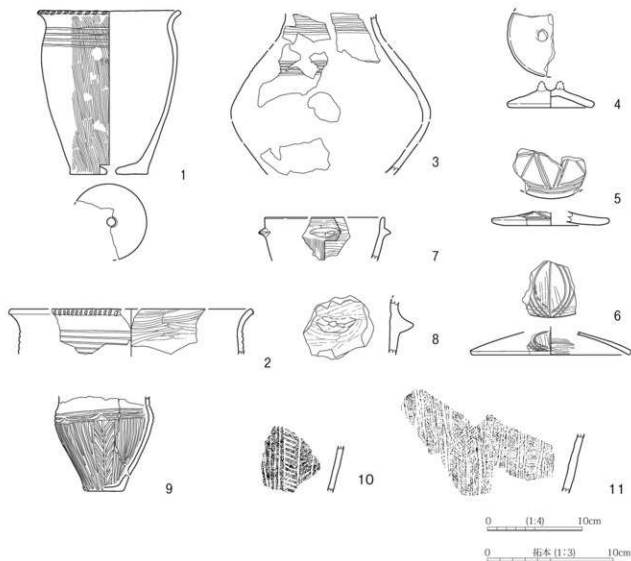


図52 塩崎遺跡群出土の遠賀川系・柴山出村式土器

(4) 氏神遺跡

朝日村向原地域道路等整備事業

本遺跡は、^{クサガハ}鎖川の支流である内山沢左岸、標高約810mを測る南東向き緩斜面の段丘上（波田面）に立地する、縄文時代中期初頭、中期中葉及び平安時代中期（10世紀中葉から後葉）の集落遺跡である。昨年度、朝日村向原地域道路等整備事業に伴い、4月から8月にかけて発掘調査を行い、2,000㎡の範囲を調査した。その結果、以下の遺構及び遺物が出土した。

主な遺構

時期	遺構の種類	数
縄文時代中期初頭	竪穴建物跡	3
	陥し穴	1
	土坑	32
縄文時代中期中葉	竪穴建物跡	2
	焼土跡	1
	土坑	3
縄文時代後期後葉	陥し穴	1
	竪穴建物跡	1
平安時代中期	掘立柱建物跡	2
	竪列	1
	墓穴	1
	土坑	14
不明	土坑	44

主な遺物

時期	遺物の種類	数
縄文時代	土器 (前期末葉～中期中葉、後期後葉)	11,255
	ミニチュア土器	5
	土製品	12
	石器 (草創期、中期初頭～中期中葉)	1,423
弥生時代	石器	1
	土器 (灰輪陶器、土師器)	1,348
平安時代	鉄製品 (刀子)	1
	人骨	1

本年度は、これらの成果の本格整理作業に着手した。遺構図版組、土器復元作業、遺物実測及びトレース、遺物写真撮影、遺物図版組、各種計測、観察表作成、原稿執筆、報告書作成を行い、年度末に報告書を刊行した。それをもって本報告

とし、本事業に係る発掘調査はすべて終了となった。以下に概要を記述する。

縄文時代

草創期と前期末葉の遺構は出土しなかったが、草創期に属する可能性のある尖頭器の先端部及び、前期末葉に属する十三菩提土器、三角印刻文を有する土器、浮線文系の土器等の遺物が出土した。

中期初頭は、竪穴建物跡、陥し穴、土坑等の遺構を確認した。土坑は、同時期の竪穴建物跡の周囲に分布し、貯蔵穴及び墓穴の可能性のあるものが認められた。これらの遺構から、五領ヶ台Ⅱa式土器及びそれに並行する時期の土器群が出土した。在地の土器の他、北陸系や東海系、関西系と考えられる遠隔地の土器片も出土した。出土状況で特筆すべきは、墓坑の可能性のある土坑からほぼ完形の深鉢形土器が出土したことである。その他は、遺構埋土から出土した破片資料が中心である。これらの遺構と土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物及び、竪穴建物跡における炉の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定により、5,584～5,051calBPの暦年較正值が得られた。これらの土器に伴い出土した石器は、中期初頭の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー、打製石斧、敲石、凹石、石皿、台石、砥石等が認められ



図53 縄文時代中期初頭竪穴建物跡出土遺物



図54 縄文時代中期初頭土坑出土遺物

る。石鏃、石錐、ピエス・エスキューは黒曜石が主体的に用いられる。黒曜石は、産地推定分析の結果95%が諏訪エリアの星ヶ台群、5%が和田エリアの鷹山群と小深沢群であることが分かった。その他の石器は、遺跡近隣で採取可能なチャートや砂岩、泥岩が主体的に用いられる。また、遠隔地の石材である、下呂石製の剥片及び二次加工ある剥片が出土した。

中期中葉は、堅穴建物跡と貯蔵穴の可能性のある土坑を確認した。これらの遺構から、藤内I式に平出第Ⅲ類A土器を伴う土器群が出土した。中期初頭と異なり、遠隔地の土器片が認められないことが特徴としてあげられよう。出土状況で特筆すべきは、堅穴建物跡の炉に蓋をするような状況で、完形とほぼ完形の深鉢形土器が出土したことで、同じ堅穴建物跡の埋土から、完形やほぼ完形の土器及び大形の土器片が、所謂「吹上パターン」の様相を呈して出土したことである。これらの遺構及び土器群の絶対年代は、土器に付着する炭化物の放射性炭素年代測定により、5,265～4,877calBPの暦年較正值が得られた。これらの土器に伴い出土した石器を、中期中葉の石器群と位置付けた。器種は石鏃、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキュー、打製石斧、砥石等が認められる。石材利用形態は中期初頭と同一であるが、下呂石等の遠隔地の石材が出土しないということがわかった。

後期後葉の遺構は、陥し穴を1基確認した。埋土から加曾利B式土器が出土した。この遺構の分布は、中期の堅穴建物跡や土坑が集中する範囲から外れる。中期と後期では、遺跡の空間利用が異



図55 縄文時代中期中葉堅穴建物跡出土遺物

なっていたと推定されよう。

平安時代

平安時代は、堅穴建物跡、掘立柱建物跡、杭跡、墓穴、土坑を確認した。堅穴建物跡から、10世紀中葉から後葉に比定することできる土師器、黒色土器、灰釉陶器、鉄製刀子が出土した。また、墓穴から人骨が出土している。人骨は頭骨で、頭位軸は北から東に30度傾き、顔面は北西方向を向く。歯が出土し、鑑定を茂原信生氏（京都大学名誉教授）に依頼した結果、性別は不明だが、年齢層は壮年から熟年程度と思われ、3咬頭性の上顎左第3大臼歯の舌側咬頭を含む舌側半の可能性が高いとご教示いただいた。堅穴建物跡出土遺物の絶対年代は、カマド構築礫に付着した炭化物及び、埋土から出土した飯に付着する炭化物の放射性炭素年代測定の結果、前者は408～537calAD、後者は776～991calADの暦年較正值が得られた。前者の結果は土器群の編年と相違するが、これは放射性炭素年代測定に用いた試料の状態に起因するものである。後者の結果は、土器群の編年から推定される絶対年代に、おおむね近い値となった。

(村井大海)



図56 平安時代堅穴建物跡出土遺物

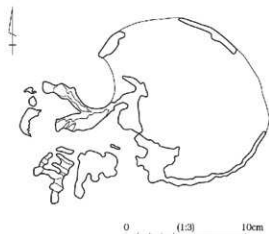


図57 平安時代墓坑出土人骨

(5) ふじ塚遺跡

一般国道20号(下諏訪岡谷バイパス)改築工事

本遺跡は、2020年度に発掘作業を実施し、中世末から近世初頭の礫石経塚を検出した。

本年度は礫石経の整理作業を行った。約4万個の礫石経は洗浄を全て終了し、そのうち約1万個の注記・分類・計測、簡易的な写真撮影、文字の判読を実施し台帳を作成した。以下、文字の判読が終了したものについて報告する。礫石経の文字判読や礫石経塚については、立正大学の時枝務教授のご指導を賜った。



図58 注記作業



図59 計測作業

礫石経の石や文字の特徴

礫石経塚の調査では、検出時において表面は数cmほどの凹凸をもつ楕円状のまとまりとしてとらえることができた。このまとまりごとに枝番号



図60 礫石経の写真撮影

(SM1-1～SM1-31)を付けて礫石経を取上げ、整理作業も実施している。

文字が書写された石は長軸約2～12cm、短軸数mm～10cm、厚さ数mm～8cm、平均径は約1～8cmを測り、大きさは不揃いである。重量は数g～700gとばらつきがある。形状は角稜が10%以下で、円礫約20%、亜円礫約40%、亜角礫が約30%を占める。石材は安山岩、流紋岩、石英閃緑岩、砂岩、頁岩、緑色片岩、緑色岩類などが認められる。これらの石は遺跡東方を流れる砥川で採集可能である。これらのことから、ふじ塚遺跡の礫石経は近隣で採集できる手頃な石を選択せずに使用していると考えられる。

全体の約半分の石に、文字を明確に判読することができた。他に扁やつくりなど一部しかわからないものや僅かな墨痕が残る石を合わせると、文字を書写したといえる石は全体の8割に及ぶ。時枝氏によれば、礫石経の中で書写されている石は通常2割程度なので、ふじ塚遺跡での書写割合は多いといえる。

そのほかの特徴として、石の大きさに対する文字の大きさの比率がさまざまであることが挙げられる。大きな石に見合わない小さな文字が書写されていたり、小さい石に目いっぱい文字が書写されていたりする。文字の線幅から推定して、筆もバリエーションがありそうである。また、非常に達筆で判読しやすい文字から間違って書写され判読しづらい文字までさまざまである。時枝氏によれば、前者は文字を書くことに慣れている人、後



図61 時枝精立正大学教授の指導風景

者は文字を書くことに慣れていない人が書写したと考えられ、経文の書写には僧侶と一般の人が関与した可能性がある。

経文の特徴

ふじ塚遺跡の礫石経は、1個の石に1文字もしくは数文字書写した「一字一石経」である。中には石の多面に書かれているものが含まれている。時枝氏には基本的に法華経の経文が書写されていると指摘されているが、法華経以外の経文（「南無大日如来」「南無阿弥陀仏」や干支（「寅」「卯」「子」など）、数字（「一」「三」「八」など）、梵字も判読していただいた。法華経の経文とそれ以外の文字との割合を把握し、法華経の経文以外の文字は何を意味するのか今後調べていく必要がある。本年度は全体の約1/4を観察したにすぎず、来年度以降も整理作業を継続して実施し、ふじ塚遺跡の礫石経の特徴を明らかにしていきたい。



図62 礫石経の文字

（左から「天尊」、「南無大日如来」、「南無阿弥陀仏」、「南無阿弥陀・仏」）

和鏡について

礫石経塚からは和鏡1点とかわらけ2点、銭貨71点が出土している。礫石経塚で何らかの儀礼がおこなわれていたと考えられる。かわらけは合わせ口の状態で出土し、中には供物が入られていたと思われるが、残存物は認められなかった。時枝氏によると、鏡は漢式鏡を真似て作られた「擬漢式鏡」で、国内で15世紀に作られた和鏡とされる。鏡面に土とともに白色の付着物があつたため、物質名を特定するために蛍光X線分析（元素マッピング法）と赤外分光分析（FT-IR）を委託により実施した。

蛍光X線分析（元素マッピング法）では、白色物質が付着している部分はその下に存在する和鏡の金属元素が検出された。主成分は銅（Cu）と鉛（Pb）で、ヒ素（As）、セレン（Se）、銀（Ag）、スズ（Sn）、アンチモン（Sb）、水銀（Hg）である。分析結果から、白色物質は蛍光X線分析では検出できない有機物の可能性がある。なお、鏡の研磨にはスズアマルガム（スズと水銀の合金）が一般的だが、検出結果から銀アマルガム（銀と水銀の合金）使用の可能性が報告されている。

実体顕微鏡による観察では、白色物質は「透明繊維」の集合物とされた。赤外分光分析ではその赤外吸収スペクトル図から「ワタ属」の繊維の可能性が高い。今回の分析結果は和鏡の埋納方法を明らかにできる資料となる。（長谷川桂子）



図63 和鏡の鏡面に付着している白色物質

(6) 沢尻東原遺跡

北沢東工場適地の開発事業

本遺跡は2019年度に発掘作業を実施した。本格整理作業は2020年度から開始し、本年度で2年目となる。遺構に関しては個別遺構のデジタルトレースと写真図版作成、遺物に関しては土器の復元と実測（土器・土偶・石器）を実施した。遺物の実測は、委託してオルソ画等を作成した。

遺構数は以下の通り。

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	50	縄文時代中期
	1	古墳時代前期
屋外埋設土器	43	縄文時代中期
土坑	54	縄文時代中期

縄文時代中期の集落構造

沢尻東原遺跡では猪沢式期から曾利Ⅱ式期までの竪穴建物跡を50軒検出した。集落の変遷は、猪沢式期に4軒で居住を開始した後、徐々に数が増加し、曾利Ⅰ式期には19軒と最盛期を迎える。しかし曾利Ⅱ式期には2軒まで激減し、終焉を迎える。

竪穴建物跡の配置をみると、集落の東西両端に建物跡が存在しない空白部があるため、居住域が大きく北群と南群に分かれる。北群が各段階とも建物軒数が多く集落の継続期間が長い。また、出土遺物量は北群が多く、本遺跡では集落の全期間を通して北群が南群に対して優位であったと考える。

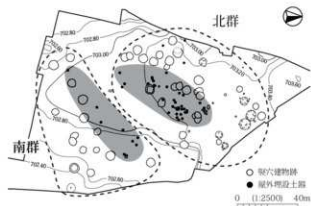


図64 沢尻東原遺跡の主要遺構配置図

集落内の居住域が2つに分れる例は、埼玉県行司免遺跡や青森県上野尻遺跡など、当該期の集落に類例が多数あり、集落構造を比較検討することも今後の課題となる（図64）（註1）。

沢尻東原遺跡から出土した千曲川流域の土器

土器の復元と図化作業が進み、沢尻東原遺跡で主体的に出土する土器が勝坂式系統の土器である点が判明した。一方、外来系土器の中でも千曲川流域に分布する土器（後沖式・焼町式）が少なからず存在することが明らかになりつつある（図66）。両者とも器形が復元できる例がある。焼町式土器は器面の加飾量が少ない例から密なものまで確認できる。また、諏訪地域でその影響を受けたとみられる例（図66-4）が含まれる。縄文時代中期中葉に千曲川流域などとの交流が盛んだったことがうかがえる（寺内2004）。

双口土器（図65）

12号竪穴建物跡の埋土中から破片で出土した。2つの口縁を持つのに胴は一つという特異な形であり、特別な用途が存在した可能性がある。出土例も少なく、辰野町では初見となる。法量は推定値で器高21cm、幅23cm（1口の径は11cm）を計る。胴部の文様は、棒状工具による2列の押しきりでパネル状に区画し、区画内には縦位、横位、斜位等の沈線を充填する。建物跡では藤内式期の土器が多数出土しており当該期に属すると推定する。

（廣田和穂）



図65 12号竪穴建物跡出土 双口土器

註1：早稲田大学教授高橋龍三郎氏の御教示による。

引用参考文献

寺内隆夫2004「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器」
『国立歴史民俗博物館研究報告』120



図66 沢尻東原遺跡で出土した千曲川流域の土器及び影響を受けた土器

Ⅳ 普及公開活動の概要

分類	内容	場所等	期日	参加者数(名)	
1	施設公開	夏休み考古学教室2021	当センター	8/6・7	238
2	現地説明会 現地公開		真光寺遺跡	7/11	13
			上五明桑里水田址	11/19・20	55
			長沼城跡	12/6・7	138
	遺跡見学会	座光寺探訪 座光寺の発掘現場を歩く ～座光寺石原遺跡・五郎田遺跡～	座光寺石原遺跡 五郎田遺跡	11/15	17
3	講座	旧石器時代の長野県	篠ノ井老人福祉センター	5/20	23
		縄文中期のジョッキ形土器	篠ノ井老人福祉センター	6/17	20
		石から鉄へ	篠ノ井老人福祉センター	7/15	21
		篠ノ井の古墳と積石塚古墳	篠ノ井老人福祉センター	9/16	22
		篠ノ井地区の遺跡・歴史散策	当センター	10/21	22
		耳飾りの歴史	篠ノ井老人福祉センター	11/18	20
		「屋代ムラ」その日その時、そして復旧・復興への道のり	篠ノ井老人福祉センター	12/16	23
	出前授業	縄文時代の遺物や人々の生活について	長野市立鍋屋田小学校	6/18	33
		縄文時代の遺物や人々の生活について	上田市立南小学校	7/1	109
		遺跡からわかる吉田の歴史	長野市立吉田小学校	7/9	72
		縄文時代の編み物	千曲市立東小学校	7/14	20
職場体験	長野市立篠ノ井東中学校生徒	当センター	11/8	3	
4	速報展・ 講演会	掘るしん2021	長野県立歴史館	3/13～5/9	1993
		掘るしん in たつの 展示会	辰野美術館	6/5～7/18	725
		掘るしん in たつの 講演会	辰野町民会館ホール	6/6	104
		県庁ロビー展	長野県庁	11/4～12	—
5	施設利用		展示室		62
			図書室		63
			総計	3796	
			国補対象計	1737	

◎上記の内、太字の普及公開活動は、文化庁の国補事業「地域の特色ある埋蔵文化財補助事業」を活用して実施した。

◎展示室・図書室の利用人数は3月10日現在の数字。

(1) 施設公開

○夏休み考古学教室2021の開催

実施日：8月6日（金）午後1時～4時

8月7日（土）午前9時～午後3時

目的：夏休みの期間中に、埋蔵文化財センターの施設を公開し、展示室や実際の整理作業を見学してもらう。また、埋蔵文化財に関連する体験を家庭で挑戦してもらうことで、埋蔵文化財に対する理解をより深める。

内 容：

- ・施設公開…展示室や土器及び石器の実測作業を公開、埋蔵文化財や考古学の質問に回答
- ・体験…施設内での体験は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため実施しなかったが、埋蔵文化財に関連する体験を自宅で行う教材として「まが玉作成キット」を配布した。

来場者数：238名

6日（金）86名、7日（土）152名

昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症感染



図67 リモートによる質疑応答の様子



図68 石器実測作業見学の様子

防止のため、施設内での体験の中止や規模を縮小して実施した。

当センターの業務理解の促進や埋蔵文化財に対する理解の深化という施設公開の趣旨に基づき内容を検討し、あわせて新型コロナウイルス感染症感染防止対策を講じた上での実施となった。

地元篠ノ井地区を中心に長野市内の小学生以下の子供とその家族が多数来場された。毎年開催しているイベントのため、何年も続けて来場している方が一定数おり、夏休みのイベントとして定着し、当センターが所在する篠ノ井地区に対する地域貢献としての意義は大きいと考える。また、初めて来場される方も多く、埋蔵文化財センターの業務や埋蔵文化財行政に対する理解、考古学に対する普及啓発に資するイベントとなっている。

施設内は、床に縄文時代の動物の足跡を配するなど社会的距離を保つ工夫をこらし、安心して見学していただけるよう工夫した。

ブースは、実測作業の見学、展示室の見学、昨年度のアンケートで体験型ブースの実施を望む声が多かったことを受け、来場者の考古学や埋蔵文化財について質問に、当センター職員がリモートで回答する質疑応答であった。初めての試みであったが、いずれも参加者には好評であった。

しかし、アンケートなどでは施設内での体験を望む声も聞かれた。来年度は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえた上で、来場者が安心して参加できるような公開内容を考えていきたい。

また、本年度は、自宅で埋蔵文化財に関する体験ができる教材として「まが玉作成キット」、来場の記念品として辰野町沢尻東原遺跡で出土した焼町土器をデザインしたトートバックを配布し、どれも好評であった。

来場者へのアンケートでは、「実測作業がとてもすばらしいと思いました。いろいろな方のおかげで、次の世代に歴史が伝えられていくことに感動しました。」「生まれ育った篠ノ井に、こういう施設があることは新しい発見でした。ありがとうございました。」など、好意的な感想が寄せられた。

(村井大海)

(2) 現地説明会等

現地説明会・現地公開・遺跡見学会は、5遺跡で実施した。見学者は現地説明会・現地公開で206名、遺跡見学会で17名の計223名を数えた。

① 現地説明会

○真光寺遺跡（松本市）

開催日：7月11日（日）見学者：13名

新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、地元波田町1区住民を対象とし、参加者は事前予約制とした。当日は、報道公開も実施し、信濃毎日新聞の取材を受けた。

現地では、主に横穴式石室をもつ古墳を公開し、河原石を積んだ石室や石室入口での須恵器出土状況を公開した。波田地区で初めて発見された古墳であったこともあり、参加者が熱心に見入る姿が印象的であった。また、現場事務所で調査写真パネルと出土遺物の展示も行った。

参加者からは、古墳に築造方法やこの地の土地利用など、多岐に及ぶ質問が寄せられた。



図69 真光寺遺跡の地元説明会の様子

○上五明条水田址（坂城町）

開催日：11月19日（金）・20日（土）

見学者：55名

遺跡の調査方法や現場の生の雰囲気を見学者に体感してもらうことを目的に、説明会は調査日も行った。

現地では平安時代の集落を公開し、特に竪穴建物跡とそのカマドから多数の土器が出土した状況の説明に力点を置いた。加えて、出土遺物も展示

した。参加者からは水田の下に集落が眠っていたことに驚く方が多く、竪穴建物跡の居住人数などについての質問などが寄せられ、参加者の関心の高さがうかがえた。また、当日の様子は上田ケーブルテレビで放映された。

② 現地公開

○長沼城跡（長野市）

開催日：12月6日（月）・7日（火）

見学者：138名

現地では、内堀と外堀などの遺構を公開した。千曲川の堤防から遺跡の全容を見渡しての説明は好評であった。また、現場事務所では出土遺物の展示も行った。

両日とも雨天にもかかわらず、多くの見学者があり、長沼城跡の関心の高さがうかがえた。見学者のなかには地元の長沼小学校児童の参加もみられた。参加者からは、「次世代の子供たちが地域の歴史を学ぶ良い機会になった」などの意見が寄せられた。報道機関は信濃毎日新聞、INC長野ケーブルテレビ、NHKが取材に訪れた。

（河西克造）



図70 長沼城跡の現地公開の様子

③ 遺跡見学会

○座光寺石原遺跡・五郎田遺跡

開催日：11月15日（月）見学者：17名

歴史に学び地域をたずねる会、2000年浪漫の郷委員会、座光寺公民館の主催で「座光寺探訪 座光寺の発掘現場を歩く～座光寺石原遺跡・五郎田

遺跡〜」が行われた。参加者は座光寺公民館から座光寺石原遺跡と五郎田遺跡へ歩いて巡り、公民館へ戻る遺跡探訪であった。当センター職員も同行し、元善光寺道を通りながら周辺の文化財や発掘調査の手順などの解説も行った。天候も良く、絶好の歴史散策の日となった。

座光寺石原遺跡では、調査中のナギジリ2号古墳から姿をあらわした横穴式石室に大きな関心が集まっていた。築造年代や出土遺物などの質問が相次いだ。

五郎田遺跡では、弥生時代から平安時代の集落跡の調査の様子を公開した。遺構の重複関係の激しさに驚きの声をあげる方も少なくなかった。現場事務所では掘り出したばかりの出土品の展示も行った。(櫻井秀雄)



図71 座光寺石原遺跡 ナギジリ2号古墳の遺跡見学会の様子



図72 五郎田遺跡の遺跡見学会の様子

(3) 講座・出前授業・職場体験

① 講座

○ 篠ノ井老人福祉センター生きがいづくり講座 「おとなりさんの考古学入門」

内容(全7回実施)：

- 1) 「旧石器時代の長野県」(5/20)
- 2) 「縄文中期のジョッキ形土器」(6/17)
- 3) 「石から鉄へ」(7/15)
- 4) 「篠ノ井の古墳と積石塚古墳」(9/16)
- 5) 「篠ノ井地区の遺跡・歴史散策」(10/21)
- 6) 「耳飾りの歴史」(11/18)
- 7) 「『屋代ムラ』その日その時、そして復旧・復興への道のり」(12/16)

講座発足から4年目を迎え、応募者多数のため受講者が新メンバーとなった。

内容は、当センターの調査成果と各回講師の専門分野から自由にテーマを設定した。旧石器時代から古代まで時代ごとに、配布資料と画像によって説明する連続講座を行い、毎回活発な質問が出された。第5回講座は、篠ノ井地区の遺跡・歴史散策とし、当センターの沿革の説明の他、野外での旧更級郡役所及び津崎尚武胸像、鼻顔稲荷神社、布施氏館跡、横田城跡の見学を行った。地元の歴史は意外と知られておらず、現地に残る土塁の一部や痕跡としての水路から、中世の城館跡を想像してもらったが、非常に興味深かったという感想が聞かれた。(綿田弘実)



図73 篠ノ井地区の遺跡・歴史散策(横田城跡)の様子

②出前授業

○長野市立鍋屋田小学校 6月18日(金)

内容：「縄文時代の遺物や人々の生活について」
(6年生を2組に分け70分ずつの授業)

当センターの仕事内容と縄文人の生活について説明し、縄文土器と縄文石器の体験をしてもらった。復元した土器を間近で観察し、土器片を触る実感をしてもらった。本物を大切にみる生徒の姿が印象的であった。石器体験では、虫眼鏡を使って刃部を観察したが、刃先の細かさに歓声があがった。縄文服を着用した撮影会も行い、終始和気あいあいとした雰囲気であった。

○上田市立南小学校 7月1日(木)

内容：「縄文時代の遺物や人々の生活について」
(6年生を2組に分け40分ずつの授業)

当センターの仕事内容と、縄文時代の土器と石器について説明した。復元した土器を体感してもらい、黒曜石で紙を切ることで、石器の切れ味を体感してもらった。本物を眼の前にして驚く生徒が多く、その驚きを生徒間で共有していた。

○長野市立吉田小学校 7月9日(金)

内容：「遺跡からわかる吉田の歴史～浅川扇状地遺跡群の資料から考える」
(6年生を2組に分け45分ずつの授業)

当学校の学区には当センターが発掘した浅川扇状地遺跡群がある。当日は浅川扇状地上に立地す

る遺跡と、浅川扇状地遺跡群の調査成果を説明した。遺跡から出土した古墳時代の土師器と奈良時代の須恵器などを持参し、両者の違いについて説明した。生徒は、学区内に分布する遺跡数の多さや、自分たちが住む場所の成り立ちがわかりよかったとの意見もあった。

○千曲市立東小学校 7月14日(木)

内容：「縄文時代の編み物」

発掘で縄文時代の衣服等の布製品が出土することは少ないが、布製品があったことは縄文土器の底に網代圧痕が残ることからわかることや、編み物の編み方や原材料となる繊維、繊維の採り方も説明した。当日は、実際に網代圧痕を観察することで、生徒は歴史を肌身に触れ、実感的に学習するよい機会となった。



図75 東小学校 出前授業の様子



図74 篠ノ井東中学校 職場体験の様子

③職場体験

○長野市立篠ノ井東中学校 11月8日(月)

内容：「整理作業の体験と図書整理」

参加者：2年生3名

河原石に墨で経文を書いた礫石経の写真撮影・計測体験と、当センター所蔵の図書整理に従事した。

整理作業は初めての体験とのことであったが、遺物を細かく観察し、真剣に作業も取り組む姿が印象的であった。
(河西克造)

(4) 速報展・講演会等

①速報展

「掘るしん2021」

開催日：3月13日（土）～5月9日（日）

会場：長野県立歴史館

見学者：1993名

内容：長野県立歴史館の小展示室において速報展「掘るしん2021」を開催した。

今回は、氏神遺跡（朝日村）、沢尻東原遺跡（辰野町）、南大原遺跡（中野市）、ふじ塚遺跡（下諏訪町）、小島・柳原遺跡群（長野市）の出土資料を出品した。

特に南大原遺跡は弥生時代中期の鉄製品加工に関連する遺物、ふじ塚遺跡は近世初頭の礫石経や銅鏡などを展示した。あまり出土例のない資料であり、見学者の注目を集めた。

②地域展

「掘るしん in たつの2021」—5000年前の辰野町—

展示会：6月5日（土）～7月18日（日）



図76 塔筒形合子を見る見学者



図77 氏神遺跡出土遺物の展示

会場：辰野美術館 来館者数：725名

講演会：6月6日（日）

会場：辰野町民会館ホール

参加者：104名

内容：沢尻東原遺跡で調査した縄文時代中期の集落遺跡を地元で紹介する目的で開催した。

展示会では、出土遺物の中から優品を選んで紹介し、講演会では、早稲田大学の高橋龍三郎先生が「沢尻東原遺跡と縄文中期の社会と文化」と題して国内や海外の民族例と比較しながら集落跡の特徴を検討した。参加者からは「縄文時代の集落遺跡から集団の生活様式が推測できるのは驚いた」といった感想を得た。

「掘るしん in さくほ2021」

9月に予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により延期となった。



図78 沢尻東原遺跡出土土器の展示



図79 高橋先生の講演会

③県庁ロビー展

○生涯学習月間長野県庁ロビー展示

開催日：11月4日（木）～12日（金）

会場：長野県庁1階 玄関ホール

内容：長野県教育委員会文化財・生涯学習課による生涯学習月間の展示に協力して、当センターの事業内容や、イベントについて紹介した。

（廣田和穂）



図80 県庁ロビー展の様子

（5）施設利用

当センターでは、発掘作業・整理作業を実施している遺跡の中で速報性のある出土品や普及公開資料等を展示室において一般公開している。本年度は中野市南大原遺跡、長野市浅川扇状地遺跡群・塩崎遺跡群、朝日村氏神遺跡、下諏訪町ふじ塚遺跡、辰野町沢尻東原遺跡、飯田市リニア事業関連遺跡の出土品を展示した。本年度は60名の見学者が訪れた。（廣田和穂）



図81 展示室の様子

（6）縄文カード

普及啓発用教材「縄文カード」・「縄文カード探検マップ」・「縄文カードホルダー」を作成した。

埋藏文化財を題材としたカードを収集することを通して県内各地の展示施設を訪れ出土品を見学する契機とし、文化財の保護思想の普及や文化財を活用した地域作りを推進することを目的とする。

カードは10種類作成した。著名な国宝、重要文化財、県道だけでなく、地域の特徴を示す資料を含め、対象館は県内各地域から選択した。カードを5枚集めると記念品としてカードホルダーと学位証を授与した。カードの配布数は約3000枚で5枚以上集めた人も120名を超える。

見学者からの感想としては、「この企画がなければ県内各地の博物館に行くことはなかった」、「カード収集をきっかけに、知らない博物館を訪れることができ、良い時間を過ごせた」、など好意的な意見をいただいた。（廣田和穂）



図82 縄文カード



図83 縄文カード探検マップ、学位証、カードホルダー

(7) 出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌「信州の遺跡」

【第17号】令和3年8月6日（金）発行

- ・黒曜石体験ミュージアム「星くそ館」（長和町星箕時黒曜石原産地遺跡）
- ・飯田支所だより（飯田市 五郎田遺跡・座光寺石原遺跡）
- ・埋文展示室から（長野市 浅川扇状地遺跡群・塩崎遺跡群、中野市 南大原遺跡、朝日村 氏神遺跡、下諏訪町 ふじ塚遺跡、辰野町 沢尻東原遺跡）ほか

【第18号】令和4年3月25日（金）発行

- ・長野県宝に指定（佐久市 東一本柳古墳）
- ・発掘調査から（松本市 真光寺遺跡、飯田市 ナギジリ2号古墳）
- ・再整理により発見された貴重な資料（木島平村 根塚遺跡、諏訪市 小丸山古墳）ほか

○出前授業用テキスト「遺跡の発掘 Q & A」

令和4年2月10日（木）発行

- ・どんな遺跡があるの？
- ・なぜ遺跡を調査するの？
- ・発掘調査はどのようにやるの？ ほか



図84 「信州の遺跡」第17号



図85 「遺跡の発掘 Q & A」

○長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書130 『浅川扇状地遺跡群 社会資本整備総合交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（都）高田若槻線 長野市 桐原～吉田(1)』

令和3年9月10日（金）発行

- ・弥生時代後期中葉から後葉・古墳時代前期の集落跡、弥生時代後期終末の方形周溝墓・古墳時代前期墳墓の周溝出土土器ほかの発掘調査報告。

○長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書131 『南大原遺跡2 一般県道三水中野線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

令和3年9月16日（木）発行

- ・弥生中期中後半から後期前半の集落跡、鉄器加工等の工房跡、環状土坑列ほかの発掘調査報告。

○長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書133 『氏神遺跡 朝日村向原地城道路等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

令和4年3月11日（金）発行

- ・縄文時代中期初頭から中葉、10世紀中葉から後葉の集落跡、出土土器ほかの発掘調査報告。

○長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書136 『孫七坂遺跡 防災・安全交付金（通常砂防）（加速化）（重点）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

令和4年3月1日（火）発行

- ・造成土による地形の改変、部分的に残る縄文土器包含層、出土土器・陶器ほかの発掘調査報告。

○「長野県埋蔵文化財センター年報 38」

令和4年3月25日（金）発行

- ・2021年度の事業概要 ほか



図86 「浅川扇状地遺跡群（第1分冊）」



図87 同左（第2分冊）



図88 「南大原遺跡2」

V 指導者招へい

期 日	所 属	氏 名	内 容
5月28日	長野県警察署交通課	北村 優	交通安全講習
5月31日	長野労働局健康安全課	岸田信一	労働安全衛生職員研修
6月6日	早稲田大学	高橋龍三郎	講演会「掘るしん in たつの2021」
12月7日～9日 3月7日～9日	京都大学名誉教授 獨協医科大学 総合研究大学院大学	茂原信生 櫻井秀雄 本郷一美	出土骨鑑定、整理指導
11月30日～12月2日 2月28日～3月2日	立正大学	時枝 務	ふじ塚遺跡碑石経など整理指導
5月25日 12月9日～10日	信州大学	保柳康一	石川糸里遺跡ほか地質調査指導
12月1日 1月27日～28日	大阪市立大学	原口 強	長沼城跡微地形測量調査指導

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月23日	公共事業に伴う埋蔵文化財保護に係る関係者会議	柳澤 亮 馬場伸一郎	塩尻市
4月23日	長野県文化振興事業団館所長等会議	原田秀一	リモート会議
5月14日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	原田秀一 川崎 保	リモート会議
6月11日 9月10日 2月17日 3月25日	長野県文化振興事業団理事会	原田秀一	書面、リモート会議
6月17日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	原田秀一 川崎 保	リモート会議
7月15日	長野県文化振興事業団副館長等会議	山田秀樹	リモート会議
10月8日	長野県文化振興事業団館長・副館長等会議	原田秀一 山田秀樹	リモート会議
12月2日～3日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	山田秀樹 川崎 保	神奈川県
12月2日～3日	長野県文化財保護審議会「史跡・考古資料部会」	櫻井秀雄 西 香子	北相木村役場・北相木村考古博物館

(2) 研修会等

期 日	内 容	参 加 者	場 所
5月10日～11日	有機溶剤作業主任者技能講習	水科沙華	長野市
7月～12月	長野経済研究所 実務セミナー	村井大海ほか9名	長野市・松本市
8月12日～13日	エックス線作業主任者試験対策講座	川崎 保 寺内貴美子 長谷川桂子 馬場伸一郎 村井大海 水科沙華	長野市（センター）
8月25日～26日 2月2日～3日	埋蔵文化財担当職員等講習会	馬場伸一郎 水科沙華 村井大海 伊藤 愛 春日皓介	オンライン配信
6月14日～18日	文化財担当者専門研修「土器・陶磁器調査課程」	伊藤 愛	奈良文化財研究所
7月20日～28日	金属製品の応急的保存処理研修	水科沙華	長野県立歴史館
9月27日～10月1日	文化財担当者専門研修「遺跡調査技術課程」	水科沙華	奈良文化財研究所
10月14日～15日	甲種防火管理者講習	村井大海	長野市
11月15日～19日	文化財担当者専門研修「遺跡 GIS 課程」	馬場伸一郎	奈良文化財研究所
12月9日	考古資料保存処理講習会	村井大海 水科沙華	佐久市（長野県立歴史館）
2月7日～10日	文化財マネジメント職員養成研修	馬場伸一郎	オンライン配信

Ⅶ 関係機関等への協力

(1) 学校関係への協力

期 日	学 校 名	対 応 者	内 容
8月6日	長野市立更北中学校	市川隆之 馬場伸一郎	GIGA スクール取材
9月7日	長野市立篠ノ井東中学校	長谷川桂子 風間真起子 生稲千恵	職場体験
10月29日	長野市立篠ノ井西中学校	廣田和穂 風間真起子	職場訪問
12月17日	長野市立長沼小学校	柳澤 亮ほか	長沼城跡発掘調査見学

(2) 講師等の派遣

期 日	依 頼 者	派 遣 者	内 容
4月1日～	長野大学	川崎 保	非常勤講師（日本史概論、信州地域史）
5月20日 6月17日 7月15日 9月16日 10月21日 11月18日 12月16日	篠ノ井老人福祉センター	村井大海 綿田弘実 柳澤 亮 春日皓介 河西克造 水科沙華 寺内隆夫	おとなりさんの考古学入門 旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代（古墳） 篠ノ井歴史散策 古墳時代（耳飾） 古代（屋代・更埴桑里）
6月18日	長野県総合教育センター	川崎 保 西 香子 河西克造他	教科等教員研修「社会科の基本Ⅰ」 （遺跡の発掘から深める教材研究）
6月18日	長野市立鍋屋田小学校	綿田弘実 風間真起子	出前授業「縄文時代の遺物や人々の生活について」
6月19日	塩尻市平出博物館	川崎 保	博物館講座土曜サロン「長野県内の遺跡に残る大規模災害痕跡」
7月1日	上田市立南小学校	寺内貫美子 村井大海	出前授業「理文センターの役割、遺跡の発掘の様子など」
7月3日	長野県立歴史館	寺内隆夫	信州学講座「近くて遠い人と水」
7月9日	長野市立吉田小学校	廣田和徳 長谷川桂子	出前講座「遺跡からわかる吉田の歴史ー浅川扇状地遺跡群から考えるー」
7月14日	千曲市立東小学校	村井大海	出前授業（アプリコット・タイム）「縄文土器の底部編物圧痕」
7月28日	長野市立博物館	綿田弘実	友の会講座「考古学入門」
8月28日	佐久市大沢地区文化財保存会	若林 卓	「見えてきた中世の長命寺ー地家遺跡の発掘調査からー」
10月5日	松本市波田公民館	河西克造 西山克己	文化伝承・歴史講座「真光寺遺跡の発掘調査見学」
10月23日	安曇誕生の系譜を探る会	廣田和徳	安曇野歴史サロン講演会「安曇野市域における古代集落」
10月23日	塩尻市平出博物館	寺内隆夫	博物館講座土曜サロン「屋代遺跡群にみる災害」
11月7日	飯綱町いづな歴史ふれあい館	綿田弘実	講演会「飯綱町の縄文時代の遺跡と遺物」
11月11日	筑北村教育委員会	柳澤 亮	講座講演会「東畑遺跡出土品の特徴と縄文人の生活」
11月26日	長野県図書館等協働機構	河西克造	地域連携講座「信州の山城を歩く」
12月13日	千曲市日本遺産推進協議会	櫻井秀雄	日本遺産「月の都 千曲」ガイド養成講座
2月11日	松本市教育委員会	春日皓介	発掘された松本2021ー松本市遺跡発掘報告会（真光寺遺跡調査成果）
2月26日	新潟大学人文学部越佐・新潟学推進センター	馬場伸一郎	シンポジウム「ヒーズがつなぐ弥生時代の佐渡と地域」
3月26日	中野市立博物館	柳澤 亮	ふるさとレポート発表会「南大原遺跡の発掘調査成果」

(3) 関係機関等への協力

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
4月1日～	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財保護審議委員
4月7日 6月10日	木曾町教育委員会	平林 彰 市川隆之	木曾福島町跡発掘調査指導
4月9日 5月17日 11月16日	南相木村教育委員会	櫻井秀雄 川崎 保	大師道跡等文化財活用事業への協力・支援
5月13日 7月13日ほか	山ノ内町教育委員会	柳澤 亮 綿田弘実	国史跡佐野道跡の再整理指導
5月14日	小諸市教育委員会	河西克造	小諸城跡の調査指導
5月21日ほか	飯山市道路河川課	川崎 保	かわまちづくり推進協議会歴史・文化ワーキング会議
6月1日～	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員
8月1日～	飯綱町いづな歴史ふれあい館	綿田弘実	館蔵資料の調査および報告書作成などの指導
9月24日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	大崎・下延坂道跡の調査指導
10月1日～	川上村教育委員会	寺内隆夫	大深山道跡保存活用検討委員
10月13日～	愛媛大学先端技術研究・学術推進機構	馬場伸一郎	研究協力者（山稜・山間に展開した弥生時代の人間活動に関する実証的研究）
11月5日	小諸市教育委員会	櫻井秀雄	小諸市文化財保護審議会
11月8日～19日ほか	信濃町ナウマンゾウ博物館	柳澤 亮ほか	発掘調査現場研修受入
12月1日	須坂市教育委員会	西 香子 市川隆之	遺物実測研修受入
1月5日～6日	三重県埋蔵文化財センター	川崎 保	空堀道跡出土遺物に関する調査指導
2月8日	信濃町教育委員会	大竹憲昭	野尻湖ナウマンゾウ博物館協議会
3月11日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	石原道跡出土遺物に関する調査指導

(4) 調査資料の利用

承諾月日	申請者	対応者	内容
5月12日	個人	河西克造	七ッ架遺跡・貫ノ木遺跡報告書の転載
5月24日	軽井沢町歴史民俗資料館長	河西克造	ジュニアこうこがく9号の転載
5月27日	朝日新聞社出版書籍部長	河西克造	日向林遺跡報告書の転載
5月27日	個人	河西克造	南大原遺跡報告書の転載
5月28日	木簡学会会長	河西克造	木簡研究17号(寄稿論文)の転載
6月10日	株式会社ニューサイエンス社代表取締役	河西克造	北村遺跡(10周年記念誌)の転載
6月24日	大町市教育委員会教育長	河西克造	千田遺跡報告書の転載
6月24日	佐久考古学会事務局長	河西克造	北裏遺跡、地家遺跡ほか報告書の転載
6月28日	佐久考古学会事務局長	河西克造	小山寺窪遺跡・濁り久保遺跡報告書の転載
8月24日	福島県立博物館長	河西克造	柳沢遺跡報告書の転載
9月15日	佐久考古学会事務局長	河西克造	奥日影遺跡報告書の転載
10月29日	個人	河西克造	塩崎遺跡群出土資料の閲覧
11月4日	長野県立歴史館長	河西克造	小島・柳原遺跡群報告書の転載
12月10日	長野県図書館協会	河西克造	塩崎城見山岩遺跡ほか報告書の転載
12月20日	松本市教育委員会教育長	河西克造	真光寺遺跡画像の借用
1月20日	石川県小松市立図書館長	河西克造	柳沢遺跡報告書の転載
2月16日	松本市教育委員会教育長	河西克造	真光寺遺跡画像の借用
2月17日	韓国慶北大学校人文学院 HK 事業団長	河西克造	屋代遺跡群報告書の転載
2月21日	株式会社雄山園代表取締役	河西克造	ふじ塚遺跡画像の借用

VII 組織・事業の概要

(1) 組織

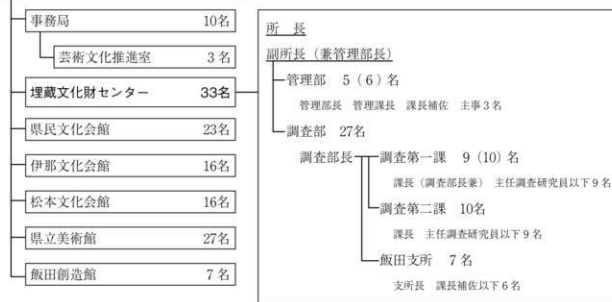
令和3（2021）年9月3日現在

一般財団法人長野県文化振興事業団

【評議員】5名 堀内征治 笠原甲一 中坪成海 小出貞之 石川利江

【理事会】12名

理事長：近藤誠一(元文化庁長官) 副理事長：金澤 茂 常務理事：山本晋二
 理事：市澤英利 唐木さち 松山 光 松本 透 北沢理光
 監事：金井貞徳 丸茂洋一
 監事：小川直樹 中村 誠 参 与：阿部精一



(2) 職員(臨時職員を除く)

令和3（2021）年10月1日現在

	所 長	原田秀一
	副 所 長	山田秀樹
管理 部	管理部長(兼)	山田秀樹
	管理課長	神田弘一
	主 事	日向 育 高野和子 酒井清美
調 査 部	調査部長	川崎 保
	飯田支所長	櫻井秀雄
	調査課長	[第一課(兼)]川崎 保 [第二課] 西 香子
	調査課長補佐	[第一課] 河西克造 [飯田支所] 若林 卓
	主任調査研究員	[第一課] 廣田和徳 長谷川桂子 [第二課] 寺内貴美子 柳澤 亮
	調査研究員	[第一課] 村井大海 田中一徳 春日皓介 [第二課] 馬場伸一郎 水科汐華 風間真起子 [飯田支所] 伊藤 愛 鈴木時夫 遠藤忠実子
	調査指導員	[第一課] 西山克己 寺内隆夫 [第二課] 大竹憲昭 綿田弘実 市川隆之 [飯田支所] 平林 彰 藤原直人

(3) 事業

事業名または箇所名		委託事業者等	事業箇所	事業内容	精算(千円)
委託・整理作業	一般国道18号 (坂城更地バイパス)改築	国土交通省 関東地方整備局 長野国道事務所	長野市 塩崎遺跡群 石川桑里遺跡 長谷鶴前遺跡群	整理作業 発掘作業	93,548
			坂城町 上五明桑里水田址	発掘作業	61,787
			下諏訪町 ふじ塚遺跡	発掘作業 整理作業	45,440
	一般国道158号 (松本波田道路)改築		松本市 真光寺遺跡	発掘作業	75,433
	長沼地区防災整備事業	国土交通省 北陸地方整備局 千曲川河川事務所	長野市 長沼城跡	発掘作業	79,157
	県道三水中野線改築	長野県 北信建設事務所	中野市 南大原遺跡	整理作業 報告書刊行	12,940
	県道高田若槻線建設	長野県 長野建設事務所	長野市 浅川扇状地遺跡群	整理作業 報告書刊行	10,175
	防災安全(通常砂防)関連	長野県 佐久建設事務所	南相木村 孫七坂遺跡	発掘作業 整理作業 報告書刊行	19,132
	座光寺上郷道路	長野県 飯田建設事務所	飯田市 座光寺石原遺跡 ほか2遺跡	発掘作業	69,076
	北沢東工場跡地開発	辰野町	辰野町 沢尻東原遺跡	整理作業	24,992
	向原地域道路等整備事業	朝日村	朝日村 氏神遺跡	整理作業 報告書刊行	21,576
	リニア中央新幹線	東海旅客鉄道株式会社	飯田市 五郎田遺跡 ほか4遺跡	発掘作業	86,399
	技術指導	青木村教育委員会	青木村	青木村内遺跡	分布調査等
長和町教育委員会		長和町	長和町内遺跡	発掘作業等	1,190
	研 修 等	長野県教育委員会	奈良文化財研究所等		
自主事業	普 及 啓 発	8月 夏休み考古学教室			3,284
		3～5月 掘るしん2021 6月 掘るしん in たつの			
		随時 遺跡の現地説明会			
		随時 出前授業、職場体験			
		広報誌「信州の遺跡」17・18号、出前授業用テキスト「遺跡の発掘Q&A」			
		ホームページ公開			
合 計				607,229	

Ⅸ 調査研究ノート

- (1) 長野市塩崎遺跡群出土鉄剣の基礎的検討
岡山大学社会文化科学学域
特任助教 ライアン・ジョセフ
- (2) 『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』更新に関わる分布調査
～市町村技術指導の成果と課題～
調査指導員 寺内 隆夫
- (3) 下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴
調査課長補佐 河西 克造
- (4) 下諏訪町ふじ塚遺跡の和鏡
調査部長 川崎 保
調査課長補佐 河西 克造
主任調査研究員 長谷川桂子

(1) 長野市塩崎遺跡群出土鉄剣の基礎的検討

ライアン・ジョセフ (岡山大学)

1 はじめに

長野県長野市塩崎遺跡群で出土した鉄剣(以下、本例)は、ガラス小玉とともに木棺墓SK1198より検出された。土器は出土していないため、詳細な時期比定は困難であるが、隣接する方形周溝墓との関係などから、弥生時代終末期頃に位置付けられる可能性がある¹⁾。当該期の長野県域の鉄剣出土例が少ないだけでなく、本例が日本列島における鉄剣の保有や流通を考える上でも大変示唆的な資料である。その出土状況や時期などについては、正式な調査報告書の刊行を待たざるを得ないが、ひとまず本稿では本例の形態的特徴を確認した上で、その意義について述べることにする。

2 鉄剣の法量および形態的特徴

まずは、本例の法量および形態的特徴を確認しよう(第1図)。本例は、残存全長22.8cm、身部長13.65cm、茎部残存長9.15cmを測る短剣である。茎部は茎尻が欠損しているが、類例の長茎短剣²⁾の茎部長が通常10cmを前後することから、全長23~24cmに復元できる。よって、本来の身部と茎部の比率は凡そ一対一であったと考えられる。

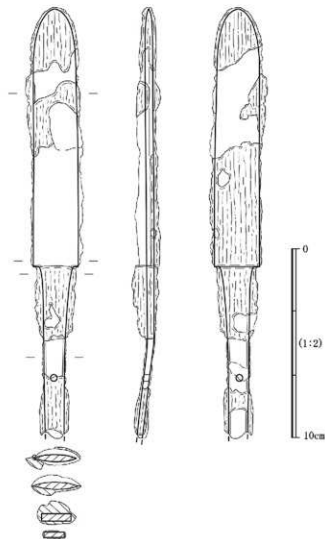
関は、左右の切れ込みがそれぞれ3mmを測る左右対称の直角関である。身部の最大幅となる関幅は2.4cmと細身である。茎部幅は、関に当たる上端部では1.8cm、中間部では1.1cmであり、茎部は緩やかに細くなっていく形状を呈する。茎部側面の軸が若干曲がっているが、接合の影響と考えられ、「折り曲げ鉄剣」ではない可能性が高い。直径4mmを測る目釘孔の存在がX線写真で確認できる。

身部厚は4mm、茎部厚は、上端部では4mm、中間部では3mmと薄手である³⁾。身部横断面形態は、凸レンズ形を呈する。身部横断面形態および厚みを勘案した筆者の分類では、「薄丸短剣」に相当する。

以上を踏まえ、本例は岩井顕彦の長茎短剣Ⅱb類(岩井2007)、杉山和徳のⅢ-2型短剣(杉山

2015)および長茎短身鉄剣A類(杉山2016)、ライアン・ジョセフの長茎短剣Ⅱb式(ライアン2017)および薄丸短剣Ⅱ式(ライアン2021)などに分類できる。

次に、装具の様子を確認しよう。身部および茎部に付着している木質の存在から、本例は鞘および把が装着されていることがわかる。身部の側面に合わせ目がみられるため、鞘の形態は二枚合わせ式(豊島2008a)、把についても、木質が一周するため、一本造り式多方向穿孔型(豊島2004・2008a)であると判断できる。把縁の形状や沈線



第1図 塩崎遺跡群出土の鉄剣

などの意匠により、把装具は細分可能である（岩本2006、豊島2008a）が、本例の遺存状態によりさらなる細分は困難である。

3 鉄剣の時代的位置づけ

木棺墓SK1198は土器が出土しておらず、また他の遺構との切り合い関係がないため、鉄剣そのものからその時代的位置づけについて考えてみよう。

薄手の長莖短剣は、弥生時代後期後葉まで遡る可能性はあるが、大半の出土例は弥生時代終末期以降に位置付けられる（ライアン2017・2021）。本例のように、身部と莖部の比率がほぼ一対一の薄手長莖短剣の盛行期は、弥生時代終末期～古墳時代前期前半を中心とするが、古墳時代前期を通じてみられるため、その下限を限定することは困難である。

二枚合わせ式の鞘は弥生時代から古墳時代にかけて継続的に認められる。また、一本造り式多方向穿孔型把装具は、弥生時代後期後葉まで遡る可能性はあるが、基本的に弥生時代終末期以降に位置付けられる（豊島2004・2008a）。このタイプの把装具は長莖を取めるために削出されたものであるため、上述した長莖短剣と歩調を合わせた動向を示す。

型式学的な変化が少ないため、鉄剣の編年の位置づけは、多くの場合、時期幅を含まざるを得ない。また、遺存状態により、本例に着装されていない木製装具から時期を絞ることも困難である。以上を踏まえ、本例を弥生時代終末期～古墳時代前期前半に位置付けることが妥当であろう。

4 鉄剣の生産と流通

当該期において長莖短剣は、北部九州・瀬戸内海沿岸地域・北近畿を中心に製作されていた可能性が指摘されている（村上1999、岩井2007、杉山2016、ライアン2017・2021ほか）。北部九州や瀬戸内海沿岸地域において薄手短剣が製作されていた可能性については、大方の見解が一致するところであるものの、北近畿での生産については、見解が分かれている（岩井2007、福島2007）。いずれにしろ、当該地域において薄手の長莖短剣が数

多く分布しており、その流通を考える上で重要な地域と考えられる。

「同形同大品」が西日本に多いことや東日本における鉄製武器の製作水準（鈴木2020）を勘案すれば、本例が東日本諸地域で製作されたことと積極的には評価できない。このように、塩崎遺跡群出土鉄剣が弥生時代終末期頃に西日本より流入したと考えた場合、①北近畿から日本海沿岸諸地域を経由する北回りルート、②瀬戸内から太平洋沿岸諸地域を経由する南回りルート（杉山2008）のどちらかを想定することができる。本例に木製装具が着装されていることから、後者の可能性が高い（杉山掲揚）。いずれにしろ、その具体的な流通経路については、今後、鉄器、玉類、土器など複眼的に検討する必要がある。

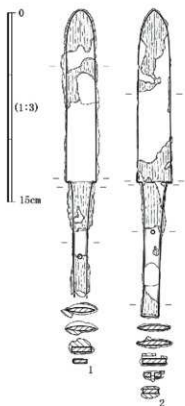
なお、後述するように、本例が初期ヤマト政権による政治的器物の配布が開始された後に属する場合には、弥生時代以来の継続的な地域間関係に加え、善光寺平などの有力（諸）集団への配布という新たなベクトルにも注意を払わなければならない。

5 長莖短剣の入手方式に関する予察

最後に、他地域で製作された可能性が高い本例がどのように塩崎遺跡群の運営（諸）集団に入手・保有されたのかについて若干の予察を述べよう。

まずは、同じ長野市に所在する和田東山3号墳（45.2mの前方後円墳）から出土した短剣の法量を確認しよう（第2図-2）。全長24.3cm、身部長13.65cm、莖部長10.65cmを測る長莖短剣である。関幅は2.7cmと細身である。莖部幅は、上端部では1.9cm、中間部では1.25cmを測る。また、身部厚および莖部厚は、それぞれ4mmを測り、身部の横断面が凸レンズ形であることから、筆者の薄丸短剣Ⅱ式に相当する。さらに、木製の付着状況から、鞘および把が着装されていることが明白である。

塩崎遺跡群出土例は、莖尻が欠損しているため、正確な莖部長は不明であるが、興味深いことに、本例と和田東山3号墳出土例の身部長は同一である。鍛造品にもかかわらず法量が概ね一致す



第2図 「同形同大」の長茎短剣
1.塩崎 2.和田東山3号

る点、関幅が細身である点、茎部が緩やかに幅を狭めていく点、そして鞘および把が着装されている点なども酷似した様相として評価できる(第2図)。

この2例の他にも、ほぼ「同形同大」(岩井2007)と評価できる出土例は少ない。多くは同様に全長23cm~24cmを志向する⁴⁾が、ここでは、これらの資料の身部長に注目したい。すなわち、福岡県頼田高見遺跡SH 3号住居址例が134cm、広島県油免遺跡SB61例が137.5cm、香川県平尾3号墳第1主体部例が139cm、兵庫県出持2号墳第7主体部例が残13.2cm、田多地引谷7号墓第3主体部例が残13.8cm、梅田東11号墓第1主体部例が13.4cm、京都府奈良岡南1号墳例が13.7cm、ゲンギョウの山4号墳例が13.75cm、群馬県成塚向山1号墳例が13.6cmなどである。身部長こそ異なるが、同様な長さ、とくに身部長を志向していることが明白である。

こういった「同形同大」と評価できる薄手の長茎短剣は、広域流通品と評価されている(岩井

2007、杉山2015・2016、ライアン2017)が、これら「同形同大品」の2例が同じ善光寺平において出土している事実は注目に値しよう。塩崎遺跡群と和田東山3号墳は直線距離で約13km離れているが、千曲川で繋がった同じ小地域といえよう。無論、単なる偶然の産物である可能性は排除できないが、それぞれの長茎短剣の入手契機および保有(諸)集団は、必ずしも無関係ではないと考えたい。

ここでそれぞれの出土遺構の時期が問題になってくる。塩崎遺跡群の木棺墓SK1198は時期比定要素に乏しいが、現段階では、弥生時代終末期頃と推定されている。一方で、和田東山3号墳は、古墳時代前期中葉に位置付けられる(小林編2020)。前者の時期が判然としないため、両者の間に時期的な開きが存在する可能性があるという指摘にとどめたい。時期差を認めた場合、集団内における長期的な保有が想定されよう。

和田東山3号墳から、初期ヤマト政権より配布されたと考えられる(菊地1996、豊島2008bほか)ヤリが出土しているが、古墳の副葬品が様々な入手契機の蓄積からなる複合体(川畑2015ほか)である以上、長茎短剣など他の副葬品までも機械的に「配布品」とはできない。実際、長茎短剣は小規模古墳に偏在しており(菊地2008)、初期ヤマト政権との関係を積極的に評価することが難しい(ライアン2019)。

本例の時期がこの議論を大きく左右しており、また器物の流通を考古学的に実証することが極めて困難であるが、両者が無関係でない限り、和田東山3号墳と同じ善光寺平の大規模集落である塩崎遺跡群から酷似する長茎短剣が出土した事実については、主に二つの可能性があろう。すなわち、①畿内中枢部を含む他地域より入手された「同形同大」の長茎短剣を和田東山3号墳の造営主体が塩崎遺跡群の造営主体を含む善光寺平の有力(諸)集団に分与した可能性、または②善光寺平に流入した「同形同大」の長茎短剣が小地域内の有力(諸)集団間において保有・共有され、結果的に塩崎遺跡群木棺墓SK1198の副葬品にも和田東山3号墳の副葬品にも供された可能性である。

6 おわりに

本稿では、塩崎遺跡群出土鉄剣の量と形態的特徴を確認した上で、その生産と流通について若干の予察を述べた。本例の出土遺構の時期が判然としないため、その流通背景を突き止めることが困難であり、採用される時期によっては、その具体的な背景も大きく変わってくる。塩崎遺跡群および和田東山3号墳の長茎短剣の入手契機が同様な背景下のものとする仮説は、更なる論証が必要であるが、他地域との比較を重ねて検討すべき今後の課題とする。鉄剣研究のみならず、地域社会における鉄器の流通と保有を考える上でも示唆的で貴重な資料である。

本稿を執筆する機会を与えてくださった川崎保氏と櫻井秀雄氏に感謝申し上げる。また、本稿を執筆するにあたり、下記の機関からご高配を賜った。末筆ながら記して謝意を表す。長野県埋蔵文化財センター、長野市立博物館。本研究はJSPS特研奨励 JP18F18003の助成を受けたものである。

註

- 1) 長野県埋蔵文化財センターの櫻井秀雄氏にご教示頂いた。
- 2) 短茎と長茎は、茎部長7cmを境に分類される(岩井2007、杉山2015、ライアン2017ほか)。
- 3) 身厚6mm未満、茎部厚5mm未満のものを薄手、それ以上のものを厚手と分類される(杉山2015、ライアン2019・2021)。
- 4) 全長23cm~24cmを志向する背景としては、当時の尺の意識が働いていたのではないかと考えられる。

引用文献

- 岩井顕彦 2007「北近畿出土弥生時代鉄剣の再検討」『物質文化』84 物質文化研究会
岩本崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第90巻第4号 日本考古学会
川畑純 2015『武器が語る古代史』京都大学学術出版会
菊地芳朗 1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会
菊地芳朗 2008「成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
小林三郎編 2020『長野市和田東山古墳群の研究—和田東山3号墳発掘調査報告—』長野市教育委員会

- 杉山和徳 2008「東日本における鉄剣の受容とその展開」『古文化談義』60 九州古文化研究会
杉山和徳 2015「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会
杉山和徳 2016「長茎短身鉄剣に関する一考察」『埼玉考古』第51号 埼玉考古学会
鈴木崇司 2020「弥生時代の東日本出土鉄製武器にみる鉄器製作技術」『考古学研究』第67巻第3号 考古学研究会
豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号 日本考古学協会
豊島直博 2008a「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』同成社
豊島直博 2008b「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第22号 群馬考古学研究会
福島孝行 2007「弥生墳墓における鉄剣の副葬(一)—丹後地域—」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』同志社大学考古学シリーズ刊行会
村上恭通 1999「鉄製武器形副葬品の成立とその背景」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古会
ライアン・ジョセフ 2017「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212 古代学研究会
ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—吉備地域を中心に—」『日本考古学』49号 日本考古学協会
ライアン・ジョセフ 2021「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号 考古学研究会

図版出典

- 第1図：筆者実測(長野県埋蔵文化財センター)
第2図：1 筆者実測(長野県埋蔵文化財センター)
2 筆者実測(長野市立博物館)

(2) 『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』更新に関わる分布調査

～市町村技術指導の成果と課題～

寺内 隆夫

1 はじめに

遺跡(埋蔵文化財包蔵地)の把握と周知は、地域の歴史や文化への気づきを促し、それらを日々の暮らしや観光資源として活かす方法を探るための第一歩となる。また、遺跡を通して地域の誇りを醸成し、次世代に繋いでいく方法を模索する上でも鍵を握る。

ところが、地下に埋もれて目につきにくい遺跡は、把握と周知を怠ると知らぬ間に破壊されてしまう危険性を孕んでいる。さらに、地元住民や行政、開発事業者にとって、場所や範囲が不正確、あるいは市町村間で精度が大きく異なっていると、遺跡保護への対応・調整に戸惑う原因となってしまう。こうした点から、公的に『埋蔵文化財包蔵地地図(遺跡地図)』(以下、『包蔵地地図』)を作成・周知することが重要である。

県内では、専門職員による試掘を伴う詳細分布調査を実施している自治体と、未実施の自治体間で、『包蔵地地図』の基準や精度に差が生じていた。こうした点を是正するため、長野県教育委員会(以下、県教委)は、一定基準に則した『包蔵地地図』への改訂を各市町村にお願いしてきた。しかし、自治体によっては、専門職員の不在や、分布調査のノウハウがないことなどから、対応に苦慮してきたのが実情であろう。

他方、(一財)長野県文化振興事業団に属する長野県埋蔵文化財センター(以下、県埋文)は、大規模開発に伴う発掘調査の減少が予想される中、業務内容の見直しに取り組んでいた。

こうした現状を踏まえ、包蔵地の把握と周知を推進する県教委、『包蔵地地図』更新を検討していた青木村教育委員会、業務の見直しを模索する県埋文の3者が連携していくこととなった。

本稿は、青木村での『包蔵地地図』更新に伴う遺跡分布調査の事例報告である。県埋文としても初めての業務であり、今回の成果と課題に対し

て、各方面からご批判・ご教示をいただきたい。今後『包蔵地地図』更新を検討している市町村、あるいは県埋文の技術指導・業務委託のあり方を検討する上で、たたき台となれば幸いである。

2 調査に至る経緯

(1) 埋蔵文化財包蔵地の把握と周知の推進

全国で開発に伴う発掘調査が増加・定着した時代、文化庁は『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について』(文化庁2008)の中で、自治体ごとに差があった包蔵地の把握と周知についても基準を示した。これに則し、県教委は『埋蔵文化財包蔵地の把握と周知に関する基準について』(県教委2014)で県基準を示し、各市町村教委に『包蔵地地図』の更新をお願いしてきた。

(2) 県埋蔵文化財センターの技術指導として

青木村教育委員会(以下、村教委)は、『包蔵地地図』更新に着手するため、2021(令和3)年、県教委へ協力を打診した。村教委には埋蔵文化財専門職員が不在で、地元有識者も多忙のため調査に専念できないなどの課題があったためである。同年2月の協議には、県教委の要請で、専門職員を抱える県埋文がオブザーバー参加することとなった。その後、3者協議に移行する中で、県埋文から技術指導の職員を2ヶ月間派遣し、分布調査に協力することとなった。

短期間で成果が求められるため、県教委在籍中に遺跡確認調査や包蔵地範囲の改訂に携わり、『県基準』策定作業にも関わった経験により、再任用の調査指導員である筆者が抜擢されたと受け止めている。



第1図 青木村の位置

(3) 調査期間と方法

3者協議で決まった『包蔵地地図』更新業務の内容と技術指導の概略は以下のとおりである。

- ・目的 既存の『青木村埋蔵文化財包蔵地地図』と一覧表の更新。主に既存遺跡の範囲の明示と、中世城館跡などの追加
- ・期間 2021(令和3)年4月1日(木)～5月30日(日)分布調査。続いて、地図・一覧表等を村教委が取りまとめ、周知・公開、県教委へ報告
- ・担当者 青木村教育委員会次長 宮下剛男、職員 清水正夫、技術指導 寺内隆夫
- ・方法 現地調査(踏査)は、試掘を伴わない表面採取と地形等の確認。室内で既存資料の確認・検討はか
- ・技術指導 分布調査(2ヶ月間)に参加し、踏査の手順や方法、包蔵地地図・一覧表作成方法などの技術指導を行う

3 青木村『包蔵地地図』更新に向けて

(1) 木村と村内埋蔵文化財の概要

小県郡青木村は長野県東部、上田市の西方12kmほどに位置する(第1図)。千曲川の支流である浦野川などの流域低地と扇状地、山地からなる。面積は約57km²で、その8割を山林が占めている。人口は4千人余を数える。

歴史に目を向けると、令制東山道の推定路(近世の保福寺道)が村内を貫いており、その沿線が埋蔵文化財の宝庫と目される。中世では、在地勢力の城館跡、国宝三重塔を有する大法寺などが知られているが、いずれも埋蔵文化財包蔵地としては未登録である。青木三山と呼ばれる子檀岳、夫神岳、十観山をはじめ信仰の山が多く、近世・近代の里と山を結ぶルート上に宗教関連施設が残存している(一部が村指定文化財)。また、この時代に6回の農民一揆が起り、「義民の里」「夕立と騒動は青木から」とも呼ばれている。そのため、住民の一部には遺跡と言えば義民の墓など(村指定文化財)、との感覚もある。今回の調査対象からは外れるが、近世以降の遺跡保護は重要課題になると思われる。

発掘調査事例には、上田楽谷丘高校による中世遺跡のほか、「歴史の道」調査(長野県教委1987)に伴う保福寺道の試掘(五十嵐1990)、ほ場整備事業に伴う岡石遺跡(調査団1976)や牧寄遺跡(村誌編纂委員会1994)がある。すべて昭和時代後半の事例で、小規模かつ件数も少なかったこと、その後本格的な発掘調査もなかったことから、必ずしも埋蔵文化財に対する住民の関心が高いとは言えない。

(2) 調査の目標

『包蔵地地図』は継続調査と更新が前提である。地下のすべてを見通すことはできないし、近世以降の埋蔵物で重要性が認められれば追加することになるからである。今回の調査条件では、完璧を目指すことは難しく、当面の行政措置に対応させるための中間報告という位置づけとなる。開発行為に対し「文化財保護法」に則した行政措置を円滑に進めることが、村の開発担当部署や村教委の喫緊の課題だからである。目標の一つは、これに耐えうる地図を作成することである。

しかし、こうした業務だけに固執・忙殺されてしまうと、文化財保護の本来の目的、地域の誇りやロマンの源である遺跡を周知し、村の将来像に取り込む観点が薄れがちになってしまう。そうならないためにも『包蔵地地図』の作成にあたっては、上位に位置付けられる村の文化財保護に対する構想などを念頭におく必要がある。遺跡の場所を知ることで地域の歴史・文化の舞台を実感し、



第2図 「せばと」発掘地点西の保福寺道現状(東山道推定地)

学ぶ楽しさにつなげること、現在の暮らしを調し
どう活かすかを創造すること、次世代へ地域の誇
りを伝えることが大切である。二つめの目標は、
その基礎データとなりうる『包蔵地図』の作成
である。

今回、後者について充分に意見交換ができたわ
けではなかったが、調査に入るにあたり重要なポ
イントは、①古代東山道関連遺跡群、②中世の地
域社会を復元できる遺跡群、にあるだろうとの話
はさせていただいた。青木村は「日本一住みたい
村」(宝島社2016)にも選ばれている。今後は、
自然の豊かさや行政サービスの良さなどに加え、
地域の歴史・文化への誇りやロマンを伝える取り
組みにも力を入れていく必要があろう。例えばI
ターン住人の次世代・次々世代が定着するには、
地域を誇りに感じ、守りたい、見せたいと感じる
資源が必要である。その一つは、遺跡を含めた地
域の歴史や文化の中に求めることができよう。

①・②は青木村の魅力発信する上で、重要な埋蔵
文化財資源になると考えられよう。

4 分布調査の方法・手順

(1) 具体的な到達目標

一方、『包蔵地図』をどこまで仕上げるか、
具体的な到達目標も確認しておく必要がある。そ
れは、

- ① 旧版で○印だけの遺跡に範囲を与える
- ② 旧版と『村誌』や現地踏査メモとの齟齬を
解消し、位置や名称の確定
- ③ 『村誌』に載る中世城館跡の追加
- ④ 旧版に掲載されていない遺跡の追加
- ⑤ 近世以降の遺跡について村教委に提案
- ⑥ 開発終了箇所における遺跡残存の可能性に
ついての指摘
- ⑦ 『包蔵地図』更新版の完成、諸手続き、周
知・公開に関する技術指導
- ⑧ 地元の文化財・歴史への関心の醸成

などである。特に①～③は、3者協議によって最
低限求められた到達点である。④～⑥は、将来の
改訂版に向けて足掛かりをつけておく点で、技術
指導の立場からの目標といえよう。また、⑦・⑧

は村教委への技術指導となる。

(2) 方法と手順

現実的な問題として、期間内に村内全域の悉皆
調査は難しく、効率よく目標に到達するために
は、調査地点や方法を絞り込む必要があった。

その方法と手順は、村全体俯瞰→重要地点想定
→現地踏査→検討→補足調査とした。

具体的には、

- ① 村全体を俯瞰し、実感を得る(山頂から)
- ② 既存の地図・空中写真の読み取り(室内)
- ③ 旧版作成時や『村誌』の調査記録など、既存
情報の精査(室内)
- ④ 現地確認と表面採取、聞き取り(現地)
- ⑤ 周知の遺跡外での踏査(現地)
- ⑥ ①～⑤作業の検討、下図・表作成(室内)
- ⑦ 必要箇所の補足調査(現地)

まず①②で、村全体を俯瞰し、各時代の遺跡立
地の適地を抽出した。②では、ほぼ整備などで改
変された旧地形や特徴的な地割を復元し、低地の
遺跡の有無を推測した。その上で、①～③を総合
的に検討し、先にあげた重要ポイント①東山道と
②中世の地域社会に関し、鍵となる地区を割り出
した。東山道関係の岡石遺跡、八ツ塚遺跡、牧寄
遺跡周辺、中世では西洞地区全域、龍仙寺周辺な
どである。

(3) 地形区分ごとの取捨選択手順

一方、重要ポイント以外の地区を踏査するにあ
たっては、地形区分ごとに取捨選択もおこなっ
た。村内の地形は大きく、ア 山岳・高原、イ 扇



第3図 十観山から青木村の中心部を俯瞰

状地、ウ 浦野川流域などの低地に分けられる。
 ア 山岳・高原 往復だけで半日は費やしてしまうこと、空中写真から畑地の山林（植林）・敷化が徐々に進んでいることが判明した。そのため、主に旧石器～縄文時代前半期の遺跡が想定される高原地帯の踏査は一部（入奈牧場内遺跡）にとどめた。また、高地の山城跡や山岳信仰遺跡の踏査は別の機会に譲った。

イ 扇状地 緩斜面の好立地に見えるが、小砂利混じりの土地が多く、主な開墾事業は中世以降と思われた。よって、推定東山道沿いの扇端部を除き、扇中部から扇頂部にかけては、縄文～古代とされていた箇所よりも、中世的な遺跡立地に主眼をおいて踏査することとした。

ウ 浦野川流域などの低地 ほ場整備が完了しており、古地図・空中写真を参考に、道隆神遺跡周辺の微高地（宅地周辺）に踏査範囲を絞った。また、すでに住宅や公共施設が密集し、包蔵地登録のない村の中心部については、再開発に伴う不時発見が想定されそうな地点を対象とした。

5 重要ポイントに関する想定と成果

ここでは、重要ポイント①古代の推定東山道と関連施設群、②中世地域社会を復元できる遺跡群について実施した調査のうち、代表事例となる2ヶ所に絞って報告を行う。

(1) 古代の推定東山道と関連施設群

近世に活況を帯びた保福寺道沿いを、古代の令

制東山道に比定する研究者（黒坂1992ほか）は多い。その関連性を探る調査が岡石遺跡で行われ、一部が浦野野跡公園として保護されている。

官道を想定すると、a. 道路敷、b. 馬飼育に
 関する施設群、c. 関連する寺社、祭祀場、d. 馬飼育に
 関する牧や関連施設、e. これらを支える水田などの
 生産域、f. 官衙や生産の場で働く人びとの集
 落等々が、さほど遠くない地点に存在するはずで
 ある（近江2015、中村2017ほか）。ただし、水田
 可耕地がさほど広くなく、難所である保福寺峠越
 えを考えると、規定距離の駅家だけでなく、他の
 場所にも関連施設（例えば牧寄遺跡やハツ塚遺跡
 付近、上田市側の浦野地区）が点在、あるいは移
 設されたことも想定しておく必要を感じた。

まず、古代官道の発掘調査が進んでいる他都
 府県の事例（鳥取県埋文2018ほか）を参考に、
 米軍撮影の空中写真（国土地理院HP）と、明治
 時代初期の字塚岡・水田切岡（村誌編纂委1993）
 で、直線路と考えられる令制東山道の場所を想
 定した。その上で、駅家の推定地である岡石遺
 跡（五十嵐1990）とハツ塚遺跡周辺（武部2004）
 と、牧寄遺跡周辺を検討した。

その結果、保福寺道が扇状地や山麓縁の直線
 路（第4・5図）に近く、令制東山道もほぼ同じ
 場所に埋もれている期待が高まった。また、岡石
 遺跡付近ではこの道に直交するN8°E前後の畦



第4図 令制東山道の痕跡を探す
 床敷遺跡（A）から岡石遺跡（B）間の直線的な屋（1）と
 保福寺道（舗装道路）。右手は方格地割のあった水田



第5図 鳥取県青谷横木遺跡「山麓遺跡の復元イラスト」
 （鳥取県埋文2018）

畔（青木村誌1993）が、ほぼ百数m間隔で上田市浦野周辺まで確認できた（第6・7図）。これにより、道を地割の基準にした水田開発の可能性がでてきた。岡石遺跡には発掘された古代堅穴住居跡の主軸がこれに近い例があり、地割が古代までさかのぼる可能性もうかがえた。

次に、岡石遺跡の地割上の交点（現道交差点付近）を仮基点（第6・7図の★）にすると、東隣の軸線上に惣門地籍（寺関係か）や、大法寺付近の字塀線が乗る可能性がでてきた。前身の古代寺院が岡石遺跡の北北東（鬼門）を抑えていた可能性が想定される。岡石遺跡の北、阿鳥川沿いには「大庭」地籍（祭祀関連の名称か）があり勾玉採取の記録がある。公的な施設の北側、水辺の祭祀域が想定できよう。また、岡石遺跡の北側尾根上には飯縄神社、南側の浦野川を越えた地区には日吉神社（戦国期に現在地に移転）があり、地割上に乗る可能性も出てきた。

このように既存資料をあたってみると、上田市浦野を含めた地割上に、各種施設（遺跡）が存在する可能性が高まった。残念ながら、ほ場整備と阿鳥川の氾濫などで、現地の地割が大きく変わっ

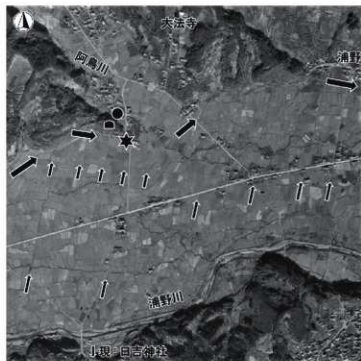
ており、今回の踏査では古代までさかのぼる確証は得られなかった。そのため、推定東山道や水田地割交点部分の一部を岡石遺跡や道陸神遺跡に含めておくにとどめた。今後の試掘調査などによって確認することを期待したい。

（2）中世の推定道と土地利用形態

古代官道の直線路とは対照的に、保福寺道より一段高い扇状部（小谷の中央部）と山麓には、各谷の集落間を結ぶ曲線路が現在も残っている（第8図）。沿線上の各谷中央には東洞地区の薬師堂や中洞地区の村松神社があり、未発見の中世居館跡や集落の存在が浮上した。一方、信仰施設や城跡がある子檀岳山頂へ向かって、里から延びる道が各谷筋や尾根筋に存在していた。

旧版の『包蔵地地図』に未登録であった中世の遺跡に関しては、この谷と谷を結ぶ道沿い、山岳信仰に関わる道沿いを中心に踏査した。その代表例として西洞地区を紹介する（第8図）。

事前打ち合わせ時に、村松の館跡とその周辺を歩いた時の印象では、a. 谷を掌握する居館の場所としては奥すぎないか。b. 両側の尾根に城跡があるが、対応する集落や諸施設は谷のどこか。



第6図 岡石遺跡★周辺に残っていた方格地割（国土地理院・空中写真に加筆）



第7図 岡石遺跡を基点★とした地割上の養目箇所（岡石遺跡発掘調査団1976に加筆）



第8図 西洞地区に展開する中世遺跡群ほか

c. 縄文・弥生の記載がある遺跡とすると、小砂利混じりの扇状部で立地的にはよくない。d. 信仰の山である子楯岳の眺望がよく、現在も登山路の一つがあること、などが気になった。

まず、拠点となる遺跡の探索をおこなった。浦野川低地に近い扇端部には、塚穴古墳や古代の駅家候補地の一つでもある八ツ塚遺跡がある。中世の新興勢力としては、旧勢力の本拠地を避け、未開拓の扇央～扇頂部へ触手を伸ばすと想定した。その拠点は、各谷を結ぶ曲線路と子楯岳への道の交差点、湧水点の近くでもある第8図★と想定した。踏査では、道がこのわずかな区間だけ直線になり、直交する凹地（堀跡か）や土塁も認められ、内耳土器片などが採取できたことから村松生地の館跡として新規登録した。

薄ヶ尾城跡の主郭直下の谷奥は竹ノ下地蔵（館の下か）であり、城関連の施設が予想された。水田開発済みで遺物が拾えず包蔵地としては保留したが、生地—村松—竹ノ下と在地勢力の拠点が点在し、西洞の谷を抑えていた可能性が考えられる。今後、試掘調査などによって検証すべきであろう。

谷の開発に続き、両側の尾根筋には城・砦跡が造られていった。戦国時代末期には、徳川方の石川軍と真田軍が対峙したとの伝承が残る地域であり、石垣の状況から薄ヶ尾城跡と寺山砦跡もこの

時期に改修されたと思われる。包蔵地の範囲は、信仰関連施設の点にも加味して既存の縄張図（宮坂2013ほか）よりも広めにとった。

中世にさかのぼるとされる信仰関連遺跡では、大永寺跡が寺山砦跡直下に存在する。脇を通る道は信仰施設と山城のある子楯岳への登山道である。今回、旧版で縄文や弥生の包蔵地となっていた生地遺跡に村松の館跡を、西洞遺跡に大永寺跡を含めて登録することとした。

薄ヶ尾城跡への登城路途中には、村松岩屋堂があり、城を経由して尾根伝いに子楯岳へ通じる尾根道がある。また、東側尾根筋には、中洞地区の中心部にある村松神社里宮（村松神社遺跡とした）—中社—東城跡（今回未踏査）を経由して子楯岳へ向かう尾根道もある。今後、山間部に展開する信仰遺跡を抑えていく必要があろう。

6 重要ポイント以外の調査と成果

(1) 古墳 村内で包蔵地登録されていたのは村指定の塚穴古墳のみである。他地区に石室の石を転用した話などもあったが、確認に手間取ると考えて踏査を見送った。よって、①塚穴古墳の周辺踏査。②近世信仰塚や尾根上の神社基壇部の目視。③古墳に関係しそうな遺物（勾玉など）が出土したとの伝承がある地点に絞った。

今回、近世の信仰塚付近から勾玉採取の伝承があり、塚穴古墳とほぼ等間隔で尾根上に所在する三ツ山を包蔵地に登録した（第8図）。

(2) 古代 県内の中山間地では、9世紀代に開発が始まる事例が多い。また、千曲川流域では仁和の大洪水（888年）があり、被災後東山道沿いに新規集落が造られた可能性も想定された。

湯川遺跡群では、そのほとんどの地点で須恵器や灰釉陶器を採取することができ、包蔵地の範囲拡大を大幅に拡大する結果となった。

(3) 中・近世 『村誌』に信仰塚・墓と明記された塚の確認を行い、散布地に含める形で登録した。また、踏査の過程で廃寺の基壇や土塁の残存を確認した。西光寺跡を林口遺跡に、光明寺跡を月夜平遺跡に、各々既存の散布地範囲に含める形をとった。ただし、夫神地区の大松塚周辺の土

畷・基壇跡（今回保留）などのように、中世にさかのぼる確証のない廃寺・信仰施設は保留とせざるを得なかった。同様の遺構は各地区にありそうで、今後の課題である。

7 分布調査を終えて～今後の課題～

(1) 青木村に関わる成果と課題

今回は短期間の踏査が主であったため、今後のさらなる『包蔵地地図』充実に向けて、技術指導の立場から課題をあげておきたい。

ア 採取遺物の現地性把握の問題 小礫を大量に含む扇状地では、摩耗した土器片が採取される例があった。当郷地区には押出地名があり、後世の土砂流出時に遺物が巻き込まれた可能性もある。遺物採取地点と遺跡範囲が一致しない場合も考えられ、今後、試掘調査などによって確認する必要がある（第9・10図）。

イ 予想される未発見遺跡への対応について 住宅や公共施設が集まる村の中心街は、各時代にお

いても好立地であったと考えられる。塚穴古墳の南側低地沿い、推定東山道周辺は注意を要する。今後、公共施設の改築などで掘削が行われた際に立ち合いを実施しておく、不時発見に対処できると思われる。

ウ 近世以降の文化財の保護について 青木三山はじめ、村内には信仰にかかわる山が多い。山頂、岩屋、山頂と里を結ぶルート上、集落内には、お堂や塚、石造物などが良好な形で残っており、一部は指定文化財になっている。今回、山城の痕跡が明瞭な地点や、社寺跡の伝承地を包蔵地に加えたが、今後は、個別指定や登録でなく、地域の信仰を復元するための総合的・広域的な調査と保護の検討が必要であろう。

エ その他 保福寺道では「歴史の道」の標柱近くの道形が、林道で削られるなどしていた。また、遺跡の確認や開発に伴う発掘調査、開発事業者との調整などに対処するため、体制の充実が必要と考えられる。

(2) 県埋文技術指導としての成果と課題

今回の技術指導派遣で、感じた点をいくつかあげておきたい。

ア 県内すべてが対象地 当センターは長野県内全体が対象で、職員の地元でない場所が多くなる。決められた範囲内の発掘とは違い、分布調査の場合、ちょっとした地形の特徴や歴史的出来事、遺物採取や土地改変の伝承などが遺跡発見の決め手となる場合がある。これらの情報を得るため、市町村側担当者や地元住民との接触を円滑にすることが第一である。今回、地元の宮下次長、清水氏が同行していただけたおかげで、地権者さんらの情報を上手く聞くことができた。

また、派遣先に調査のノウハウを伝授するためには、委託業務よりは技術指導・技術協力の形が良いと考えられる。今回は短期間のため伝えられない点も多かったが、現地調査のほとんどに宮下次長が同行していただけたので、遺跡を探す時の目の付け所や、開発に伴う行政措置の方法などについて伝達する機会が得られた。



第9図 押出遺跡の現状



第10図 押出遺跡採取土器片

イ 地元の現状に寄り添う + a のプランの提案

市町村ごとに予算規模や期間、要求される着地点はさまざまである。理想的なレベルを主張することも時には必要だが、遺跡の保護には息の長い取り組みが必要となる。「包蔵地地図」も更新を重ねていくべきものである。「埋文は難しく、やっかいだ」という印象を最初に植え付けてしまっただけでは継続に支障をきたすであろう。

一方、専門家でない人が想定できる内容に留まっているのは技術指導の意味がない。県埋文が関わったことで + a があり、予想を超える成果が得られたと実感していただくことが重要であろう。

ウ 地元文化財への興味を醸成する 技術指導では、調査に同行してもらい具体的な技術や知識の伝達が基本である。しかしそれ以上に、教育委員会・役場職員や地元の方々に興味を持ってもらうことが大切である。興味を持ってもらえなければ、次への展開が望めないからである。

今回、地元向けに成果報告の話もあったが、コロナ禍の影響で断念せざるを得なかった。ただし、青木村歴史文化資料館で常設展示資料の展示替えに協力し、また、2021年夏に五島慶太未来創造館で行われた企画展「青木村にナウマンゾウ」で、長野県立歴史館による展示コーナー設置に関して橋渡しをすることができた。専門性を活かした普及活動、あるいは文化財に関わる問い合わせや協力先の紹介も、重要な技術指導の業務と考えられる。

8 おわりに

今回の技術指導は2ヶ月という短期であったため、分布調査や成果品の作成に関わる技術の伝達不十分が終ってしまった感がある。派遣期間終了後、「包蔵地地図」と一覧表の更新が滞りなく終了したことに安堵を覚えている。

最後に、香掛英明教育長をはじめ、ともに現地調査を行った宮下剛男教育次長・清水正夫氏、さらに五島慶太未来創造館・青木村図書館職員の方々、県教委文化財係担当者、前年度まで青木村役場に向向していた中沢道彦氏には多大な便宜を頂いていた。記して感謝の意を表したい。

【参考文献・資料】

- 青木村教育委員会 2006「青木村に見る義民の伝説」
青木村誌編集委員会 1993「青木村誌」自然編 村誌刊行会
青木村誌編集委員会 1993「青木村字埋文」青木村の水田
開発 明治初期の切図から 青木村誌刊行会
青木村誌編集委員会 1994「青木村誌」歴史編 上 村誌刊
行会
青木村役場 2017「日本一住みたい村づくり計画」
五十嵐幹雄 1990「東山道の残したもの—小県郡青木村の
場合—」信濃の歴史と文化の研究 (二) 黒坂周平先生
喜寿記念論文集
上田市誌刊行会 2000「上田市誌 歴史編 (3) 東山道と
信濃国分寺」上田市
近江俊秀 2015「道が語る日本古代史」朝日新聞出版
岡石遺跡発掘調査団 1976「岡石遺跡発掘調査報告書」青
木村教育委員会
木下良監修・武部健一 2004「完全踏査古代の道 畿内・
東海道・東山道・北陸道」吉川弘文館
黒坂周平 1992「東山道の実証的研究」吉川弘文館
坂井美嗣 1981「青木村辻田遺跡出土の石器」『上小考古』
8
坂本嘉和 2019「[遺構事例] 鳥取県青谷横木遺跡—駅路・
桑里・官衙—」『日本古代の輸送と道路』八木書店
鈴木正崇 2015「山岳信仰」中公新書 2310
宝島社 2016「田舎暮らしの本」2月号 宝島社出版
鳥取県埋蔵文化財センター 2018「青谷横木遺跡 I」
中井均・斎藤慎一 2016「歴史家の城歩き」高志書院
長野県 1936「長野縣町村誌」東信篇
長野県教育委員会 1987「歴史の道調査報告 XVI—XIII (復
刊)」長野県文化財保護協会
長野県教育委員会 2014「埋蔵文化財包蔵地の把握と周知
に関する基準について」
中村太一 2017「古代の道路と景観」『日本古代の道路と景
観—駅家・官衙・寺—』八木書店
文化庁 2008「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等につ
いて」
宮坂武男 2013「縄張園・新面園・鳥観園で見る 信濃の
山城と館」第3巻上田・小県編
宮原平八郎 1999「若林清先生のご案内で青木村をめぐる」
青木村教育委員会 2021「埋蔵文化財包蔵地地図」埋蔵文
化財包蔵地一覧表
- 青木村役場 HP「青木村土砂災害ハザードマップ」はか
国土地理院 HP 地図閲覧サービス
長野県庁 HP 砂防課 「過去の災害に学ぶページ」

(3) 下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴

河西 克造

1 はじめに

昨年度と今年度、長野県埋蔵文化財センターでは一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）改築工事に伴い、諏訪郡下諏訪町に所在するふじ塚遺跡の調査を実施した。遺跡内には「ふじ塚古墳」の名称で遺跡登録された古墳（方形のマウンド）があり、昨年度の調査では、このマウンドが「塚」と判明し、塚の下層で「礫石経塚（一字一石経塚）」を発見した。本稿は、この塚と礫石経塚の様相について、仏教考古学の視点を加味しつつ、調査担当者の私見を披歴するものである。

2 ふじ塚遺跡とふじ塚古墳

長野県のほぼ中央部には、県内で最も広い諏訪湖がある。諏訪湖の北側（湖北）、諏訪湖に流入する碓氷右岸の河岸段丘上にふじ塚遺跡は立地する。碓氷川の反対側には、諏訪大社下社春宮が鎮座する。河岸段丘の縁辺部付近に立地する「ふじ塚古墳」は、昭和37年に「下諏訪町誌」編纂に伴う調査を藤森栄一氏が行っている。藤森氏はマウンドが低いことと富士山を望む景勝な地に所在すること、遺跡周辺は山岳信仰が盛んな地であることから、ここが富士講の富士塚に類するものと指摘した（藤森1963）。さらに、高島藩主五代諏訪忠林が享保18年（1733年）に領内各村に描かせた村絵図（『諏訪藩主手元絵図』）には、この場所に「藤塚」の文字が描かれており（諏訪史談会1985）、明治末年の地籍図でもマウンド（土地区画）の小字が「藤塚」であることが確認できる¹⁾。これらの既存情報は、マウンドが信仰塚としての富士塚である可能性をうかがわせるものである。

3 ふじ塚古墳（マウンド）の様相

マウンドは一辺約11m四方の方形を呈し、マウンドの上面はほぼ平坦である。マウンドの上面では、硬化面や礫石と推測する礫が確認でき、随所

に及ぶ攪乱のため建物跡としての認定は困難であったが、ここに何らかの構築物が存在した可能性が高い。このマウンドは、裾部に石列を方形に配置し、土石混合で構築されている。マウンドには半人頭大～人頭大の礫が多量に含まれ、あたかも積石塚古墳を想起するものであった。さらに、マウンドの西側は硬化する土が主体、東側は礫であ



第1図 昭和37年の「藤塚」の様子
（藤森栄一氏撮影、諏訪市博物館所蔵）



第2図 ふじ塚古墳 調査前の様子（図1と同じ方向より撮影）



第3図 土石混合で構築されたマウンドの様子

る特徴がみられた。盛土(石)は、大きく2分される。また、マウンドの盛土からは、近世末の陶磁器や銭貨、礫石経(一字一石経)が出土した。

上記の調査成果から、マウンドは近世末まで存続した「塚」と理解できる。なお、礫石経には、礫を積み上げる過程でまとめて納められたものがある。何らかの容器に入れられていたものと推測でき、これら礫石経はマウンドに仏教的要素が介在することを示す。

4 礫石経塚の様相

マウンド(土石混合)を除去して姿を現したのが、約40,000点に及ぶ夥しい礫石経(以下、礫石経塚)である。この礫石経塚は、長辺7.0m、短辺4.5mの規模を有する。拳大～人頭大の礫で石列を楕円形に配置し、石列の内部に礫石経が納められている。これら礫石経の上面には起伏があり、礫石経の間には随所に隙間がみられた。旧石器時代のブロックを想起するもので、ブロックの存在は、礫石経が複数の単位で納められたことを示すものであろう。

礫石経塚からは、和鏡(15世紀)とかわらけ(16世紀)、銭貨(宋銭・明銭)が出土している。和鏡とかわらけは、礫石経塚のほぼ中央部、礫石経の上面から確認されており、礫石経を納める行為の最終段階で納められている。和鏡は表面を上位にして置かれている。かわらけは、2個のかわらけが合口の状態で出土しており、供物などが納めたと推測する。和鏡とかわらけの出土は、この礫石経塚で仏教的な儀礼が行われたことを示すものであろう。なお、和鏡とかわらけを囲むように、人頭大を超える礫が分布する。この礫は、経碑的な性格を持つか、もしくは礫石経塚の中央部に、何らかの空間を形成するためのものかは、今後の検討で明らかにすべきことである。また、礫石経に混じる状態で出土した71枚の銭貨は大半が宋銭で、永楽通宝などの明銭が含まれている。

かわらけと銭貨(永楽通宝)の年代から、礫石経塚は16世紀のものとは比定できる。この時期、ふじ塚遺跡とその周辺において書写した礫石経をこ

こに納める一連の作業が行われていたと判断できよう。

5 出土した礫石経の様相

調査では、文字の有無に関わらず、すべての礫石経を取り上げた。本格的な整理作業は緒に付いたばかりであるが、現時点までの観察では、約8割の石に文字が書写されていることが判明した。礫石経は、2～3割の石に書写されている事例が多いとの指摘²⁾からすると、ふじ塚遺跡の礫石経は書写割合が高いことが分かる。また、確認で



第4図 礫の積み上げ時に納められた礫石経の様子



第5図 礫石経塚の様子

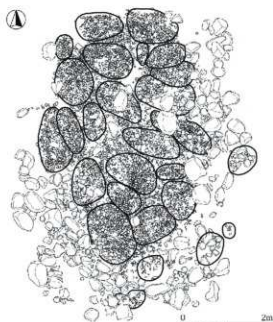


第6図 和鏡とかわらけ、礫の出土状況

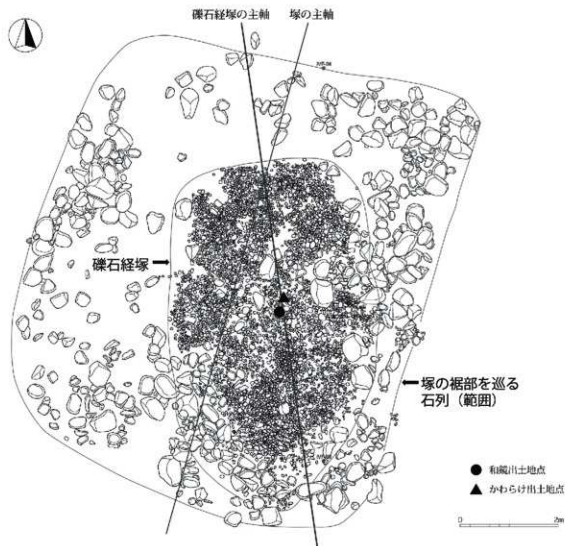
きた文字からすると、法華經(妙法蓮華經)を主体として、大日經や浄土三部經、梵字が書写されていることが判明した。さらに、經典名が判読できる礫石經の分布域がまとまる傾向があり、書写された文字は①礫石經塚全体の組成、②ブロック単位の組成を把握することで、礫石經の書写形態と納め方が明らかにできると思われる。

6 礫石經塚から塚への変遷

礫石經塚は、「礫石經を地下に埋納し、上部にマウンドをもつものが基本的な形態であるが、(中略)埋納後にマウンドを構築した場合とマウンド構築後に埋納した場合があったことが知られる。」とされている(時枝2003)。広義にみると、礫石經が出土したマウンドを「礫石經塚」と捉え



第7図 礫石經塚 ブロック認識図



第8図 礫石經塚と塚の石列 全体図

られるが、ふじ塚遺跡では①マウンドと礫石経塚は主軸が異なること、②マウンドの裾をめぐる石列と礫石経塚の石列は重複し、後者が先行すること、③礫石経塚は低いマウンド状を呈することが確認できた。かかる状況から「塚」と「礫石経塚」とに分けて捉えることができる。16世紀から近世末まで、ここが信仰の拠点であったと理解できる。

7 礫石経塚の造営について

中世以降の礫石経塚は、六十六部聖などによる廻国納経が盛行したと指摘されている(三宅1983、関1990)。かかる視点からすると、万治3年(1660年)に彈弭上人50回忌に明譽・心譽が造立した万治の石仏がふじ塚遺跡の直下に存在することは興味深いことである。礫石経塚は、諏訪を



第9図 万治の石仏(河西撮影)



第10図 大乗妙典二萬部塔(河西撮影)

拠点として浄土宗の布教を行った彈弭上人だけでなく、中世末の諏訪における聖の動向と密接な関わりがあると推測できる。また、茅野市湯川経塚(一字一石経塚)出土の経筒には、天文15年(1546)の銘とともに「奉納大乘妙典」とあり(宮坂1967)、造塔年はやや下るが、諏訪には法華経の読経もしくは納めた大乘妙典塔が残る。聖の活躍を把握する必要がある

管見の範囲で、塚と礫石経塚の関係が考古学的に把握できた事例はない。「ふじ塚遺跡の礫石経塚は、今までの調査事例では説明が困難で、礫石経塚の概念を見直すことに迫る資料となる」との時枝氏の言句に象徴されるように、今回の成果は、礫石経研究の進展に大きく寄与することになるだけでなく、従来不明瞭であった中世末～近世初頭の諏訪地域の民衆史・宗教史解明に向けて踏み出す必要性を我々に訴えたことは間違いない。今回触れることができなかったことは、別稿を期す予定である。

註

- 1) 長野地方事務局諏訪支所蔵の「長地村第八十三番区域絵図」と土地台帳
- 2) 立正大学文学部教授 時枝 務氏の指導による。

引用・参考文献

- 坂詰秀一 1990 「経塚」の概念」『古代学研究 所紀要』1 諏訪史談会 1985 「東山田村」『諏訪藩主手元絵図』
- 関 秀夫 1979 「経塚遺物の紀年銘文集」『東京国立博物館紀要』第15号 東京国立博物館
- 関 秀夫 1990 「経塚の諸相とその展開」 雄山閣
- 時枝 務 2003 「経塚」『仏教考古学事典』 雄山閣
- 長谷川桂子 2021 「ふじ塚遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報37 2020年度』
- 富士塚調査研究委員会 1996 「富士塚調査報告書」 富士市立博物館
- 藤森栄一 1963 「庄塚と墓塚」『下諏訪町誌』上巻 下諏訪町誌 編集委員会
- 松原典明 1994 「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号(「特集：礫石経の世界」) 立正大学文学部考古学研究会
- 三宅敏之 1983 『経塚論攷』 雄山閣出版
- 宮坂虎次 1967 「茅野市北山・経塚調査略報」『信濃考古』No.22
- 宮島調子 1983 『信濃の聖と本食行者』 角川書店

(4) 下諏訪町ふじ塚遺跡の和鏡

川崎 保 河西克造 長谷川桂子

1 和鏡出土の経過

令和2年に、国土交通省長野国道事務所による一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）改築工事で、下諏訪町ふじ塚遺跡が調査された。

同遺跡及び発掘調査概要については、すでに報告されている（長野県埋文2021）。また、本年度の整理作業の経過や後述する和鏡が出土した礫石経塚の速報的研究成果については、本書に掲載されているので、それぞれ参照されたい。

同年11月12日に、礫石経塚を掘り下げて調査している段階で、かわらけ、銭貨とともに和鏡が出土している。経塚のマウンド上層ではなく、下層から出土していることから、経塚造営段階に一緒に埋納されたものであると推定される。

2 発見された和鏡

種類：和鏡（擬漢式鏡）（図1～4）¹⁾

名称：蓬萊鏡²⁾

年代：室町時代（15世紀）

文様：鏡背（鏡の文様面）には「亀形の鈕座」「双鳥」「松」「笹」などが確認できている。

素材：銅（青銅）

法量：直径8.6cm、縁の高さ0.9cm、重さ129.1g（保存処理前）

3 県内の和鏡例一覧

管見の限りではあるが、長野県内の中世和鏡の例は伝世品などを含めれば、50か所88面あるが、経塚や遺跡から出土した状況がわかる発見例は30か所58面を数える（表1）。

4 和鏡発見の意義

同遺跡調査対象範囲内には、墳丘状の高まりが存在し、「古墳」と認識されていたが、今回の発掘調査の結果、礫石経塚であることが判明した。とくに学術的な発掘調査で経塚から和鏡が出

土した例は今回がはじめてである。鏡が古代の経塚から出土することは知られているが、中世の礫石経塚からの詳しい出土状況が判明したことで、和鏡を埋納する理由や逆に埋納した遺構の性格から中世和鏡の意義について検討することが可能となった。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、立正大学時枝務先生をはじめ、長野県立歴史館町田勝則、白沢勝彦、株式会社 AB.do の畔上宏夫、竹前和幸各氏の御指導、御協力を得た。文末ながら謝意を表する。

註

1) 図1のX線透過画像は長野県立歴史館撮影。図2～4のオルソ画像およびデジタル拓本は、3次元測量技術研究会：株式会社 AB.do との共同研究の成果（データは同社提供）なお、株式会社 AB.do 提供の各図は以下の特許によって作成されたものである。

◆特許1 特許 2019-062426

三次元データスケール付与方法及び三次元データスケール付与プログラム

◆特許2 特許 2019-171921

三次元データ凹凸二値化表示方法及び三次元データ凹凸二値化表示プログラム

2) 立正大学教授時枝務先生の御教示による。

表

※名称、時代は主に報告書の記述に従った。

※下伊那の和鏡の年代は主に岡田2007による

★は「信州の文化財データベース」（八十二文化財団ホームページ <https://www.82bunka.or.jp/>、県及び市町村教委監修、2020年3月20日現在）による。

長野県内和鏡一覧(表1)

経塚出土和鏡

No	遺跡名	名称等	数	時代等・出典・備考
1	坂城町北日名経塚	和鏡(藤枝雌鳥鏡、草花飛雀鏡、菰雌鳥鏡、菊雌鳥鏡、秋草雌鳥鏡、松吹鶴鏡、嗣代地雌鳥鏡)	7	平安時代末、東博編1988、采山1978 東博所蔵、発掘調査によるものではない。保元2年(1157) 鈴の師銅製経筒と共伴、大日名経塚とも
2	坂城町蓬平経塚	和鏡	1	東博編1988、礫石経塚
3	坂城町観音平経塚	和鏡	1	東博編1988、礫石経塚
4	上田市雲泉寺経塚	和鏡(片輪車飛鳥鏡、菊花散双鳥鏡、菊枝双鳥鏡、紫垣垂柳双鳥鏡、菊花双鳥鏡)	5	室町時代、東博編1988 旧丸子町西内で1897年発見。経筒(天文5(1536)年銘)と共伴したとされる。
5	千曲市堂城山経塚	和鏡(山吹飛雀)	2	鎌倉時代初、采山1978、長野市博2019 1873年堂城山で発見、武水分神社に奉納
6	千曲市矢崎山経塚	和鏡(飛鳥山吹流水文)	1	平安時代末、長野県史1988、3号経塚
7	下諏訪町伏宮経塚	和鏡(亀紐・双雀付)	2	室町時代、東博編1988、★町指定文化財、1925年発見
8	下諏訪町綿の海経塚	和鏡	1	江戸時代、東博編1988、下諏訪町誌、礫石経塚
9	伊那市下牧経塚	東塚:和鏡7、松吹鶴鏡、菊花飛雀鏡など、西塚:和鏡4	11	平安時代末～鎌倉時代初、伊那市教委1977、東博編1988
10	阿智村京の森経塚	山吹双鳥鏡、楓双鳥鏡、菊花双鳥鏡、草花双鳥鏡、梅花双鳥鏡	5	平安・室町時代、岡田2007、 山吹～草花:12C、梅花:16C
経塚出土鏡計				36

遺跡出土和鏡

No	遺跡名	名称等	数	時代等・出典・備考
11	飯綱町表町遺跡	和鏡、菊文を持つ紐座、雉または草木文	1	平安時代後期、飯綱町教委2014
12	長野市浅川西条遺跡	和鏡、嗣代地草鳥鏡	1	平安時代後期、長野市教委1976
13	長野市南宮遺跡	素円和鏡	3	平安時代後期、長野市埋文2001
14	佐久市梨の木遺跡	流水秋草双雀鏡	1	鎌倉時代前期、佐久市教委2001
15	佐久市下信濃石遺跡	和鏡	1	中世、佐久市教委2006、図・写真なし
16	川上村金峰山修験道遺跡	鏡	1	中世末～近世、川上村教委1994、長野県教委1998
17	松本市北方遺跡	和鏡破片(円鏡縁のみ)	1	長野県埋文1989a
18	松本市殿村遺跡	円鏡、花茂双鳥鏡	1	室町時代(15C前半)、松本市教委2017・2018
19	松本市北栗遺跡	和鏡(松鶴鏡)	1	中世、長野県埋文1990
20	塩尻市吉田向井遺跡	円鏡、双雀鏡	1	平安時代後期～鎌倉時代前期、長野県埋文1988
21	朝日村宮前遺跡	双雀蓬萊鏡	1	室町時代、朝日村1991
22	諏訪市荒神山古墳	和鏡(内区欠損)	1	長野県教委他1976
23	下諏訪町武居遺跡	和鏡	1	下諏訪町教委1997
24	伊那市富岡遺跡	和鏡、菊花散双鶴鏡	1	室町時代後期、伊那市教委1999
25	宮田村十三塚遺跡	円鏡、松吹鶴鏡	1	平安時代、宮田村他1984
26	飯島町岩沢城跡	和鏡	1	飯島町教委他1976、伊藤1993
27	飯田市駄科北平遺跡	松剪双鳥鏡	1	室町時代(15C後半)、飯田市教委1976、岡田2007
28	飯田市恒川遺跡群白山遺跡	菊花文	1	安土桃山時代(16C後半)、飯田市教委1992、岡田2007
29	高森町上ノ平遺跡	和鏡(州浜双鳥鏡か)	1	鎌倉時代(13C後半)、高森町教委1996、岡田2007
30	阿智村上の平遺跡	和鏡(梅花双雀鏡)	1	室町時代(16C前半)、岡田2007
その他の遺跡出土計			22	
遺跡出土鏡総計			58	

伝世品等その他の和鏡 (出土状況が不明なものを含む)

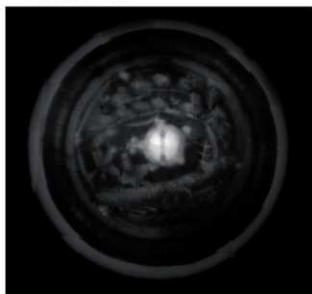
No	遺跡名	名称等	数	時代等・出典・備考
31	飯山市 小菅神社蔵	州浜松樹双雀鏡、垣根柳樹双雀鏡、菊文散双雀鏡	3	室町時代、飯山市教委2005、伝世品
32	山ノ内町宇木 八柱神社境内経塚	和鏡	1	平安時代末～鎌倉時代初、山ノ内教委1996 発掘調査によるものではない。
33	長野市大塚遺跡	和鏡(垂柳飛雀鏡)	1	長野市教委1981、発掘調査によるものではない
34	長野市斎宮	花形湖州鏡、象形文字鏡	1	旧信州新町、★
35	千曲市一重山	和鏡(菊花散し、吹寄菊花散し)	2	室町時代、米山1978、更埴市史1994 発掘調査によるものではない
36	千曲市藤ノ木経塚	双雀鏡	2	発掘調査によるものではない
37	坂城町内跡		3	室町時代か、★町指定文化財、1869年発見、永楽銭共伴
38	小谷村豆平諏訪社	菊散椿垣双雀鏡	1	★村指定文化財
39	小谷村字宮 諏訪神社	椿散双雀文鏡	1	★村指定文化財、1773年発見
40	大町市八坂音音寺	和鏡、菊二双雀文鏡	1	大町市教育要覧、治承3年(1179)3月銘の木造千手 観音立像胎内から発見
41	生坂村日置神社	和鏡	1	室町時代末～江戸時代初、★村指定文化財
42	松本市三瀬経塚		4	詳細不明
43	塩尻市福沢	和鏡2	2	塩尻市教委1985、塩尻町誌1937に報告、発掘調査によるものではない。
44	上松町	和鏡(擬漢式水草双雀鏡)	1	鎌倉時代、★町指定文化財
45	諏訪市 親塚(四賀普門)	和鏡(松鶴鏡)	1	平安時代、★市指定文化財
46	諏訪市姥ヶ懐経塚	和鏡(松吹鶴鏡)	1	
47	伊那市経ヶ岳山麓	和鏡	1	
48	飯田市 宮ノ前(中平)	和鏡	1	
49	喬木村 城原城跡遺跡	和鏡	1	中世、喬木村教委1991・1997、長野県教委1997
50	泰阜村 アラ山山頂石塚	和鏡、樹木開垣双鳥鏡	1	平安、★村指定文化財
		その他鏡計	30	

引用参考文献

- 朝日村 1991『朝日村誌下巻』
 飯田市教委 1976『駄科北平遺跡』
 飯田市教委 1980『中尾・天神遺跡』
 飯田市教委 1992『垣川遺跡群白山遺跡』
 飯田市教委 1996『北の原遺跡』
 飯島町教委他 1976『唐沢城』
 飯綱町教委 2014『表町遺跡』
 飯山市教委 2005『長野県飯山市小菅総合調査報告書』
 伊藤修 1993『唐沢城遺跡出土の和鏡』『伊那路』37-11
 伊那市教委 1973『大堂遺跡』
 伊那市教委 1975『山の神遺跡』
 伊那市教委 1977『浜射場・葛蒲沢遺跡』
 伊那市教委 1995『伊勢並・赤坂遺跡』
 伊那市教委 1999『富岡遺跡第1次(平成9年度)・第2次(平成10年度)』
 岡田正彦 2007『下伊那地方の唐式鏡・和鏡』『飯田市美術

- 博物館研究紀要』17
 神村透 1990『木曾福島町城山出土の和鏡』『木曾』23
 川上村教委 1994『金峰山修験道遺跡—中世末～江戸時代
 に金峰山ふもとの川端下区に展開した修験道遺跡の調査—』
 榎原健 1966『長野県更埴市稲荷山湯の崎—松本古墳覚書』
 『信濃』Ⅲ18-9
 榎原健 1968『平安期にみられる山地居住民の遺跡』『信濃』
 Ⅲ20-4
 更埴市史編纂委員会 1994『更埴市史第一巻古代・中世編』
 坂城町教委 1994『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』
 佐久市教委 1998『宮の上遺跡群 割地遺跡』
 佐久市教委 2001『梨の木遺跡Ⅲ』
 佐久市教委 2006『下信濃石遺跡』
 塩尻市教委 1985『堂の前・福沢・青木沢』
 下諏訪町教委 1997『武居遺跡』
 喬木村教委 1991『阿高城原城跡』

ふじ塚遺跡出土和鏡



第1図 X線透過画像



第2図 オルソ凹凸強調



第3図 オルソサーフェス画像



第4図 電子拓本画像

0 5 cm

喬木村教委 1997『伊久間原遺跡 下原Ⅱ次』
 高森町教委 1996『上ノ平遺跡』
 檀原長則 1985『中野市間山発見の八鏡について』『高井』
 73
 茅野市教委 1983『構井・阿弥陀堂遺跡』
 東京国立博物館編 1988『経塚：関東とその周辺』
 長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編 全1巻
 (4) 遺構・遺物』
 長野県教委他 1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘
 調査報告書—諏訪市その4—』
 長野県教委他 1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調
 査報告書—茅野市・原村その3—』

長野県教委 1984『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』4
 長野県教委 1997『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』7
 長野県教委 1998『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』8
 長野県教委 2009『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』19
 長野県埋文センター 1987『大久保Bほか』
 長野県埋文センター 1988『青木沢東ほか』
 長野県埋文センター 1989a『南中遺跡ほか』
 長野県埋文センター 1989b『吉田川西遺跡』
 長野県埋文センター 1990『北栗遺跡』
 長野市教委ほか 1976『浅川西条2』
 長野市教委 1981『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』

長野市埋文センター 2001『南宮遺跡Ⅱ』
長野市立博物館 2019『神と仏が宿る里』（展示図録）
原村教委 1995『狭長峰（第1次）発掘調査報告書』
松本市教委 2017『長野県松本市殿村遺跡第7次発掘調査報告書』
松本市教委 2018『殿村遺跡とその時代Ⅵ』
松本市教委 1993『松本市大村古屋敷遺跡・前田遺跡』
宮坂光昭 1968「諏訪湖東縁の終末期古墳群の考察茅野市
純塚古墳の検討から一」『信濃』Ⅲ 20-4
宮田村土地開発公社他 1984『狐塚上・十三塚遺跡（中世

居館址・十三塚）』
南安曇郡誌改訂編纂会 1956『南安曇郡誌』
箕輪町教委 1983『大原第二・三遺跡』
宮沢恒之 1993「遠山の和鏡二面」『伊那』1993-3・5
森本六爾 1933「八稜鏡を出した信濃の一古墳」『考古学』
4-3
山ノ内町教委 1996『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
米山一致 1978「特殊遺構—経塚をめぐって—」『更埴更級
地方誌第2巻原始古代中世編』同刊行会

長野県埋蔵文化財センター年報38 2021年度

発行日 2022（令和4）年3月25日

編集発行 （一財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：maibun@naganobunka.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社